
花ノ宮町限定 美少女ヒーロー

光太朗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花ノ宮町限定 美少女ヒーロー

【Zコード】

Z9908X

【作者名】

光太朗

【あらすじ】

遠い昔、なりたいものにならせてあげると、仮面の男がいた。ヒーローになりたいと、少女は願つた。そして十二年ぶりに、懐かしの町に帰ってきた少女は……！？ 勢い重視のファンタジックライトコメディ ～～11月中に完結予定です。

scene_0 「魔法が使えるんだ」

燕尾服に黒い仮面。

見るからに怪しい男が、公園で一人遊ぶ少女に近づいていく。

「やあ、お嬢ちゃん。かわいいね」

少女は砂場に座り込んで、ファミリーレストラン「ひこ」をしている最中だった。お待たせしました、ハンバーグドッグぞいます。砂の塊を並べていく。

「お名前は、なんていうのかな」

少女は顔を上げた。男を一瞥し、はきはきと答える。

「あのね、おじちゃん。ひとに名前を聞くときは、まず自分が名乗らないといけないんだよ」

田線を戻し、ハンバーグ作りを再開する。男は一瞬沈黙し、咳払いをした。

遠くを見て、田を細める。

「名、か……。そうだね。ではお兄さんのことは、美しき闇商人、」

「・・と呼んでもらおうか」

さりげなく、お兄さんを強調した。少女は首をかしげる。

「うつくしきやみしょにん、じえいじえい？」

大きな田を、何度もまたたかせた。

「うつくしいの？」

「……見てわかるだろ？、お嬢ちゃん」

「・・と名乗った仮面の男は、怒りを堪えるように、それでも甘い声を取り繕つて、いう。

「とっても、美しいじゃないか」

「そりがなあ。そんなことないと思つけどなあ」

少女は全力で正直だった。「・・は少女に背を向けて、こめかみを押さえる。十数秒で復活すると、少女に向き直り、渾身の笑みを披露した。

「それで、お嬢ちゃん。お名前は？」

「あたしは、野中ナノカ。南花幼稚園真ん中組の五歳だよ。好きな食べ物はこしあんのおまんじゅうとレーズンバターサンドで、嫌いな食べ物は……」

「いや、いいよ、わかつた」

少女、野中ナノカは唇をとがらせた。まだまだこれからだったのに。

「・・・」は砂場の脇に膝をつき、ナノカの頭をそつと撫でる。

「お兄さんはね、魔法が使えるんだ。ナノカちゃん、君にはなりたいものがあるだろう。お兄さんの特別な魔法で、ナノカちゃんのなりたいものに、ならせてあげるよ」

「なりたいもの……！」

ナノカは、目を輝かせた。

なりたいものは、たくさんある。ファミリーレストランの綺麗な店員、優しい幼稚園の先生、おしゃれなママにだってなりたい。しかしナノカは、なれるものとなれないものがあることを、知っていた。世の中にはフィクションがあるということを、理解している五歳児だった。

だからこそ、迷わなかつた。

毎週日曜日の朝、兄と楽しみに見ていくテレビアニメ。それに、兄がやっているゲームや、借りてくるDVDの世界。

本当の意味でなりたいものは、一つだけだ。

「あたし、この町の平和を守る、ヒーローになりたい！」

「いいだろつ

「・・」の黒い目が、仮面越しに光った。白いグローブをつけた手を、そつと差し伸べる。

「その代わり、心をひとつ、いただくなよ

その手が、ナノカの胸元をつかんだ。そこから薄暗い煙のようなものが生まれ、ナノカの小さな身体を浸食していく。じわりじわりと、まるで心臓そのものをえぐり出そうとするよう」。

やがて、ナノカの胸から、小さな光が飛び出した。それは輝きながら浮遊し、自ら「」の口の中に飛び込んでいく。
「ぐりと音をたてて、」・」は光を呑み込んだ。

「ああ、美味だ」

目を細め、満足そうに唇の両端を上げる。

ナノカは悲鳴をあげそうになつたが、痛みはなかつた。おそるおそる胸を押さえ、シャツをまくつりあげて直に確認する。傷があるわけでもない。

「いまの、なに？ なにをしたの？」

顔を上げ、ナノカは動きを止めた。

砂場の向こう、象の形の滑り台。シーソーと鉄棒。そこから先はもう道路で、住宅街が続く。

振り返ると、ベンチ。それだけだ。

たつたいままでいたはずの男が、姿を消していた。

「……あれ？」

そんなはずはなかつた。それとも、幻を見ていたのだろうか。遊んでいたつもりが、いつのまにか眠つてしまつて、夢を見ていたのだろうか。

ナノカの名を呼んで、道の向こうから、兄が駆けてくる。手に提げているビニール袋には、兄とナノカ、二人分のあんまんが入つているはずだった。

ひとりで待つていたのはほんの少し、五分にも満たない間だ。

「 とても良い取り引きだつたよ、野中ナノカ」

声だけが降りてきて、しかしそれもすぐに、風にかき消された。

scene-1 「嬉しいんだよ」

「ただいま、花ノ宮町！」

窓を開け放ち、野中ナノカは叫んだ。

思い切り息を吸い込んで、もつといなくてぜんぶを飲み込む。嬉しいに足をばたつかせ、顔を左右に思い切り振った。ツインテールがぐるんぐるん揺れる。

「幸せ！」

とりあえず、思いの丈を叫ぶ。せー、せー、せー……住宅街に、声がこだましたような気がした。

「こら、ナノカ。『近所迷惑だぞ。『ただいま』と『幸せ』は一日一回までだつていいだらう。昨日から何回いつてると思つてるんだ」

フリルエプロン姿の野中ヒロシが、おたまを片手に小言をいつ。

ナノカはえへへと笑つた。上田づかいに、親愛なる兄を見る。

「だつて、嬉しいんだよ。今日から学校だよ？ あたし、興奮しきて噴火しちゃうかも」

媚びているわけではなく、身長差からそういう田線になつただけだ。しかしヒロシは、額を押さえて頬を染めた。

「やばいな……！ なんだそのかわいさは！ ナノカは本当にかわいいな！ ようしきいぞ、噴火でもなんでもすればいいとお兄ちゃんは思うぞ！」

ヒロシの正体は兄バカだ。特大の兄バカだ。

「お兄ちゃんのそういうバカっぽいところ、大好き！」

心の底からナノカがいう。これはこれで、妹バカだ。

一人は右手をあげて、歩み寄つた。ガシッと腕を組み、見つめ合つて、うなづき合う。一呼吸分間を空けて、同時に天井を見上げた。

「愛！」

「こそ！」

「「正義！」」

声をそろえた。要するに、兄妹でバカなのだ。

「いつまでもこうしていたいが、ナノカ、そろそろ準備を始めてもいいところだな。トイレは行つたか？ ハンカチ持つたか？ まあ、まだ出るには少しだけ早いが…… あ、待つて待つて、そのかわいい制服姿、写真に撮るからね」

「もう、お兄ちゃん。あたし、余裕持つて早く行きたいよ。なんでギリギリまで待つの？」

一眼レフカメラで妹の写真をとりまくる兄にかまわず、カバンを肩にかけながら、ナノカが問う。

「いやあ、花ノ宮高校の制服はいいなあ。スカートもほどよく短く、それでいてお嬢様っぽさを損なわない……！ 帰つてこれてよかつたなあ、ナノカ」

しかし、どうでもいい返答がよこされた。ナノカは頬を膨らませる。

「お兄ちゃん！」

「おお、いいぞ、いいぞ！ その顔はポイント高いぞ！」「変態」

覚めた声で、ナノカは告げた。

それはまるで、海岸ぎりぎりまで押し寄せようとしてきた波が、さーっと一秒で沖まで引いて、ドロンと消えていくかのようだつた。

ヒロシは動きを止め、黙る。

静かにカメラのレンズにカバーをはめ込んで、棚に置いた。

「悪かった」

頭を下げた。ナノカはうなづく。

「ねえ、もう行つていいでしょ？ 朝ご飯だつて、まだ食べちゃダメっていうし。これじゃ、食べる時間なんてないじゃん。転校初日におなか鳴っちゃつたら、恥ずかしいよ」

「わかつてないなあ。いいか、もう少しだ。ギリギリまで、待て」

ヒロシはニヤリと笑つた。

「ギリギリアウトのタイミングで、食パンをくわえて走り出せ！忘れるな、合い言葉は、『遅刻、遅刻う』だからな！」

「ギリギリアウトなの？ やだよ、そんなの…」

ナノカは腕時計を見た。すでにギリギリだ。セーフなのかアウトなのか、慣れないナノカには判断すらつかない。

「お兄ちゃんの、バカ！」

「あ、待てナノカ、朝メシ！」

「もー！」

ナノカはテーブルの上に用意されていた食パンをひとつかむ。これでは兄の思いどおりだと知りながらも、口にくわえた。革靴にハイソックスの足を入れて、ドアを開けて走り出す。

「行ってきます ！」

アパートの階段を駆け下りると、全速力で高校へ向かった。五歳まで住んでいた、懐かしの町。以前から憧れだつた、花ノ宮高校。

やつと、そこの生徒になれる日が、やつてきたのだ。

「遅刻、遅刻 ！」

意図せず、叫んでしまつたと思ったが、遅かつた。走りながら振り返ると、ドアの前で、ヒロシがしつかりとこちらを見ていた。親指を空に向けている。その口が動いた。もはや聞こえないが、「グッジョブ」といつているのは明白だ。

「まったくもう…」

しかし、文句をいつている場合でもない。ナノカは腕時計を確認した。八時十八分。普通に歩いて、高校までは二十分ほどかかる。走ればその半分で着くのだろうか。走つて行つたことはないので、わからない。

花ノ宮高校を訪れたのは、三回だけだ。転入手続きを目的としていたため、うち二回は母の運転する車だつた。以前はこの町に住んでいたとはいっても、十二年も前のことではあてにならない。見慣れた景色があるような気もするが、気のせいだといってしまえばそ

これまでという程度だ。

近道など、知るよしもなかつた。ほかに方法はないものかと思いつつ、馬鹿正直に信号が青に変わるので待ち、懸命に走る。

「あと少し!」

ナノ力は、全速力で走り続ける。

最後の角を曲がり、正門前にたどり着き

がくつと、漆をつぶ。

アウトだつた。

自分の背よりも高い門は、しつかりと懸かれていた。

なんといふことだ。転校初日に、遅刻してしまつた。

兄を恨むしかない。

屏をよじ登る。

おおきなキノコを前にして、思ひもつかない

絶望的な気持ちで、顔を上げる。いかにも片田舎らしき広い敷地に、どんと構える花ノ宮高校。門の向こうには、ドラマなどによく見るような長い長い桜並木が続いている。やうに遠くに、古い校舎が一つ。レトロな時計台が、いかにも見下りしている。

「あれ？」

ナノカは、まばたきをした。まだ、八時二十十分を少しまわつたところだ。腕時計で確認するが、示している時刻は同じ。

おかしい。家を出るときに、見間違えたのだろうか。まさか、五分かそこらでここまでたどり着けるわけもない。

それに、門が閉まつてゐるのもわからない。八時三十分までに着けば、セーフのはずだつた。

「ねやすな……？」

そんなはずはないと思いつつ、つぶやく。

「そんなはずがないでしょ」「う

しかし、第三者によつてしつかりとつづけられた。

不機嫌そのものの、男の声。

「もう五月だというのに、まだこんな時刻に来る生徒がいたとは。八時二十分までに登校し、すみやかに一限の準備をすること。生徒会の定めた鉄の掟を、知らないとはいわせませんよ」

男は、眼鏡を人差し指で押さえるようにして、高圧的にいった。門の向こう側から、冷ややかにナノカを見下ろしていく。

花ノ宮高校の制服を着ている。教師というわけではないようだが、教師よりも偉そうだ。

「知らないよ」

ナノカは、正直にいった。事前説明の際にも、そのようなことをいわれた覚えはない。

「ねえ、入れてよ。これつて、まだ遅刻つてわけじゃないんでしょ？」

「遅刻です」

きつぱりと断言される。必死に走つて、しかも時計を見る限りでは間に合っている分だけ、納得がいかない。ナノカは両の拳を握りしめた。

「なんで！ 八時半までに着けばいいんでしょ！ そういう決まりがあつたんならあたしが悪かつたけど、知らなかつたんだからしうがないじゃん！」

怒りのままに、声を荒らげる。男は眉根を寄せ、手を顎に当てる。「知らなかつた？」

不可解だといわんばかりに、じろじろとナノカを見る。それから、もしかしてとつぶやいた。

「あなたは、今日から転校してきた……」

「こんなのつて、横暴だよ！ 正義の道に反するよー。頭に、きた

男がなにかをいいかけたようだつたが、ナノカの耳には届かなかつた。完全に頭に血が上り、周囲が見えなくなつていた。

ガシリと、両手で門をつかむ。

「うにゅにゅにゅにゅ……っ！」

「冗談のつもりではなかつた。どうこつわけか、できるとこつ気がしていた。

いまなら、立ちふさがる鉄の門を、持ち上げて放り投げてぐしゃぐしゃにしてポイすることが可能だと、可能に違いないと、確信があつた。

「強、行、突、破……！」

ナノカが十人横に並んでも、まだ足りないのではないかといつ曰大な鉄門が、ぎしぎしと音をたてる。握りしめている部分は熱を帶び、指が食い込んだ。まるでマシュマロのように。

「ちよ……な、なにを……？」

眼鏡の男が、数歩下がる。震える手で眼鏡を持ち上げた。おそらく、これからなにが起ころのかを察したのだろう。

しかしナノカには、止まる気はなかつた。時間内に校門を越えることが、いまの彼女にとつてすべてだつた。

「うりやあ……！」

とうとう、鉄門すべてが、レールから引きはがされた。

ナノカはそれを、両手でえいやと持ち上げる。砂と、コンクリートのかけらのようなものが、ぱらぱらと落ちる。

「てい！」

さらにそれを、頭上へ向かつて放り投げた。ナノカは空を見上げ、タイミングを見計らつて跳躍した。空中で、しかも片手で鉄門をキヤッチして、手紙を書き間違えたときのよう、ぐしゃぐしゃと丸めていく。正確には、ものすごい力での圧縮だ。空気の隙間を一切なくし、鉄そのものの密度を高め、できる限りに小さく。

「は！」

そして、最終的には、だれもいないグラウンドめがけて、ポイし

た。

ズシン 地面が揺れる。

ナノカは華麗に着地した。

ツインテールが、ワンテンポ遅れてふわりと落ちる。
時計を見た。八時二十五分。

「セーフ！」

ごく機嫌良く親指を立てる。これでなんの問題もない。
「じゃ、あたし、行くね」

もはや、ナノカの行く手を阻むものはなかった。ナノカは軽い足取りで、男の横を通り過ぎる。情けなくも、男は尻餅をついていた。眼鏡がズれている。

「ちょ……ちょっと、待つ……」

男は手を伸ばしかけたが、結局は下ろした。

ナノカはそのまま、カバンを前後に振りつつ、スキップで校舎へと入つていった。

scene_2 「ヒーローだもの」

三ツ山小亞羅には、憧れの少女がいた。恋、とこう言葉で安易に片付けて欲しくはない、宇宙よりも大きな思い。

過去形にしてこるのは、その少女と念つのが、実に十一年ぶりだからだ。

教室の窓から校門を見ていた、すぐにわかった。

ツインテールの美少女。

鉄門を軽々と持ち上げて、小さく丸めて放り投げた、あの美しい身のこなし。

惚れ惚れした。

手紙のやりとりをしていた十一年間、送られてくる写真を見て想像を膨らませてきたよりもずっとずっと、彼女は強く美しかった。

「なんて、素敵なの……！」

両手を組んで、うつとつと虚空を見つめる。

だから、彼女がどうやら職員室に呼ばれたらしくとわかったときには、三ツ山家の権力で全職員を解雇してやろうかと思つたぐらいだ。しかし、ほかなりぬナノカ自身が、それを望まないだろう。

それでも、教室から飛び出すぐらいのことは、しても良いはずだ。今までの小亞羅には、いくら担任の教師が来ていないと、いつも、始業ベルが鳴つてから教室を出るなどと、考えられないことだつた。

しかし、いまは違つた。

愛の力だ。

「ナノカちゃん……！」

焦る気持ちを抑えて、廊下を駆ける。

愛しの彼女は、どこにいるのだろう。まだ職員室に監禁されているのだろうか。だとすれば、自分が救い出さなければ。

縦に巻いた長い黒髪をなびかせて、階段を駆け下りる。

そうして、一階へと続く踊り場で、意中の人との再会を果たした。

「ナノカちゃん！」

勢いのままに名を呼んで、それから急に恥ずかしくなる。身をよじり、頬を染めた。

「あの……、お、お久しぶりね」

緊張で、少しだけ声が震えた。ナノカは目を見開いて、すぐに小亞羅に飛びついた。

「こあらちゃん！ 久しぶりだね！ ねえ、あたしたち、同じクラスなんだって！ また一緒にいられるね！」

笑顔全開だ。小亞羅は思わず胸を押さえる。

動悸、息切れ。鼻出血までしそうだ。

「……三ツ山財閥の令嬢が、この野蛮な転校生とお知り合いなんですか？」

一緒に階段をのぼってきたらしい男が、冷淡にいつ。

小亞羅はまつたく躊躇せず、男を睨みつけた。

同じクラスの羽島万太。成績優秀な生徒会長。家が貧乏らしく、学費と寮費を免除されている。その代わりといわんばかりに、学校での雜務をなんでもこなし、融通の利かない姿は「校長のイヌ」と囁かれる。

「近くてよ！ もつと離れなさい！」

ぴしりといつてやると、羽島万太は気分を害したようだった。眉をひそめ、ナノカから一歩分離れつつも、なにかいいたげだ。

「思っていることは、はつきりいつたらどうかしら。男としてみつともないわ」

そこへさらにたたみかける。羽島万太の眉間の皺が深くなる。

「では、はつきりいうがね。もうホームルームも始まっているんだ。三ツ山さんは、どうしてここへ？」

しかし、こたえたのは担任の竹内だった。白髪交じりのナイスガイと評判が高いが、小亞羅はそうは思わない。小亞羅にとつては、

可もなく不可もなくといったところの、数学教師だ。

小亞羅はやつと、状況を思い出した。ナノカは竹ノ内と、ついでに羽島万太と、教室へ向かっているところだったのだ。感動のあまり飛びついてしまったが、あまり淑女らしい行動とはいえない。

「もうしわけありません、先生。わたくし、どうしても野中さんに早くお会いしたくて」

非を認め、素直に謝罪する。しかし、竹ノ内は怒っているという様子ではなかつた。

「いや、まあ、それはいいんだが……」

「あたしこあらちゃんは、幼稚園のころからすく仲が良くて、引っ越しちゃつてからもずっと手紙のやりとりをしてたんですよ。ねー！」

ナノカが小亞羅の両手をとり、「ねー！」のタイミングで身体全体を傾ける。

小亞羅は鼻を押さえた。

「もう、ナノカちゃんたら……！」

エキサイティングゲージ上昇中。その様子を胡散臭げに羽島万太が見ていたので、小亞羅は慌てて口の中で咳払いをした。取り乱してはいけない。

「つまり一人は、幼なじみといふことなのかな。では、聞くが……」
竹ノ内は、声をひそめた。

「野中さんのある……超人をといふのは、昔からなのか？」

一瞬、場の空気が冷えた。

羽島万太が、ふつと目線を外し、遠くを見る。トライアウマにでもなつたのだろうか。小亞羅にしてみれば、間近で見ることができ羨ましい限りなのだが。

「あたし、なんであんなことができたかわかんないんだよねー」
ナノカだけはお構いなしに、春の空気をまといている。

では、覚えていないのだろうか？ 小亞羅は小首をかしげた。
おそらく、そうなのだろう。彼女が花ノ宮町にいたのは、五歳ま

でだ。当時から天真爛漫を絵に描いたような少女だった。つまり、思慮深さとはどちらかといふと無縁の。

覚えていないとしても、おかしくはない。

「ナノカちゃんは、ヒーローなんです」

教師に話しているというのに、野中さんと改まって呼ぶことも忘れ、小亞羅は熱を持った口調で断言した。

「幼いころ、わたくしは引っ込み思案で、よく男の子たちにからかわれていました。でもいつだって、ナノカちゃんがわたくしを助けてくれました。わたくしだけじゃなくて、この町で困っている人がいたら、いつだって飛び出していつて、だれだつて助けちゃう、そんな女の子でした」

「そうだつたつて、脳天気にナノカがハテナマークを飛ばしている。小亞羅は、そうよとつなづいて、光の宿った強い瞳で、竹ノ内を見た。

「ナノカちゃんは、ヒーローだもの。超人的なのは、あたりまえです！」

断言した。

「いや……そうこう」とじや……そうこうとか？　いやいや……んん？」

竹ノ内が額を押さえる。

「というより、そもそも、ヒーローというのは女性に對して使わないでしょ？」「

眼鏡を上げながら、冷静に羽島万太がつっこむ。

「つるさんてよ、イヌ」

「イヌ！」

羽島万太がのけぞった。小亞羅はふふんと目を細める。彼のことは好きでも嫌いでもなかつたが、今日最初にナノカと接觸したといふ一点において、小亞羅のなかで一気に敵にランク付けされたのだ。

「説明しよう！」

突然、声が響き渡つた。

それはまったく、あまりにも突然だった。小亞羅は周囲を見る。広くもない踊り場には、小亞羅とナノ力、竹ノ内と羽島万太の三人だけだ。

では上からか 見上げると、なかなか現れない転入生のことが気になつたのか、2 Aの面々が集まつてきていた。野中ナノ力の超人さを目撃していた生徒も多いので、気になるのも当然だ。しかし、彼らも声の主が誰なのかと視線を動かしている。

「下か！」

同じことを考えたのか、羽島万太が階段から身を乗り出す。小亞羅も同じようにのぞき込み

絶句した。

見知った顔が、白衣をはためかせ、拡声器を片手に、階段を駆け上つてきていた。

「お兄ちゃん？」

ナノ力が驚いている。だがもつと立派に驚いても良いだろうと小亞羅は思う。

仕事は！

小亞羅は心中でつっこんだ。ナノ力の家族事情はすべて把握している。野中ヒロシは花ノ宮大学に研究員として勤務しているはずだ。この時間にここにいていい人物ではない。

周囲の目など一切気にもとめず、野中ヒロシは踊り場へ到着すると、窓を開け放つた。わざわざそこに左足を乗せ、右手を腰にあて、左手で拡声器を口にあてる。顔はぐるりとギヤラリー目線。

「ナノ力は幼きあの日、ナゾ仮面と契約をした。それにより、野中ナノ力は、花ノ宮町にいる間だけ、超人的なパワーを発揮することが可能となつた。この地を離れて十二年、もはやあの力は失われたかに思えたが、そうではなかつた！ つまりナノ力は、花ノ宮町限 定、美少女ヒーローだつたのだ！」

右手で白衣のポケットをまさぐり、小型音楽プレイヤーを取り出す。スイッチを入れた。

ジャジャジャジャジャ、ジャジャジャジャ、ジャンジャン、チャララ

一。

ヒーロー、ヒーロー、美少女ヒーロー！

美少女ヒーロー、ナ、ノ、力！

テンションの高い曲が流れる。

本人が歌っているのは明らかだった。

「これが、変態……！」

羽島万太が未知との遭遇に息をのんでいる。

「いやあ、ナノカがこっちに住むっていうからさ、一応イロイロ用意してたんだ。無駄にならなくてよかつたよ。わわ、ナノカ、コスチュームだぞー」

「お兄ちゃんつたら、仕事はどうしたの！ あたしのあとつけてたんしょー！」

ナノカは怒り心頭のようだったが、ほかにも怒るべき点は満載なのではないだろうかと小亞羅は思う。そして同時に、野中ヒロシの差し出したレースだけのミニスカコスチュームは実の良い仕事だとも思う。

「お久しぶりです、お兄様」

小亞羅はスカートの両端を持ち上げて、丁寧に一礼した。この兄に対してなら、ある程度の耐性がある。十二年前よりよほどパワーアップしてはいるが、基本は変わっていない。つまり変態だという事実は揺らいでいない。

また、彼には感謝の念もあった。兄ヒロシが花ノ富大学に勤務することが決まったからこそ、転勤を繰り返す親元を離れ、ナノカもこの町に住むことができるようになったのだ。

「やや、小亞羅ちゃんじやないか！ いやー、理想的に成長したなー、かわいいなー。いいぞ、美少女ヒーロー親友ポジション、しかもお金持ち、完璧だな！」

ビシッ、と親指を立てる。鼻息が荒い。小亞羅は少し目線を外した。予想していても引く。

「ええと……つまり、野中さんの保護者の方ですね？」

竹ノ内が、冷静にいう。白い歯を見せて、ヒロシがうなずいた。

「もちろんですとも、先生！」

「詳しいお話は、また放課後に伺いますので、とりあえず」

…

「おい、なんだあれ

にわかに、上階がざわめいた。

すっかりギャラリーと化していた2-Aの生徒が、窓から空を見上げている。野中ヒロシが足をかけている方向とは、反対側 グラウンドの方だ。

「なになに？」

ナノカが階段を駆け上がっている。羽島万太は、どうせくだらないことでじょうといわんばかりに、眉間に皺を寄せて立っている。

「おい、もうとっくにチャイムが鳴っているだらう。早く教室に…

…

竹ノ内が担任として「あたりまえの」とを口にする。しかし数人の生徒が、それを遮った。

「先生、空に城が…」

「あの城、なんですか？」

返事は期待していないのだろうが、そう問いかける。

「…城？」

羽島万太が、眼鏡を押さえる。

「城？」

小亞羅も、つぶやいた。

そして階段を上り、クラスメイトたちの隙間から、空を見上げる。

「お城だ！ しかもファンタジーなやつ！」

ナノカが叫ぶ。

空には、いかにも中世を思わせるヨーロッパ調の城が、どじんと浮かんでいた。

scene_3 「敵がいるはずです」

それはたしかに城だった。
城としかいよいのがない。

外觀はヨーロッパに現存する古城を思わせるが、しかしそれにしてはあまりにも真新しい。テーマパークに建設された城、といったほうが近いかもしれない。

いずれにしても、異常なのは、その姿形ではなかつた。
場所だ。

花ノ宮高校上空に、浮かんでいるのだ。

羽島万太は、メガネを押さえた。

朝から超人的な力を持つ転入生を間近で見て、今度は空に浮かぶ
城。

夢、かもしれない。
だつたらしいなど切に思う。

「本当に、まったく、心当たりがないといふのかね？」

花島校長が、重々しく問い合わせる。

万太は、野中ナノカと共に、校長室へ呼び出されていた。授業どころではなかつた。上空に城が浮かんでいる状態で、さすがに教科書を読んでなどいられない。

「だから、お城のことはぜんぜん知りません、つてば。ヒーローがどうのつていうのも、よくわかんないし」

ナノカがはきはきと答える。彼女の気持ちに呼応するように、ツインテールが跳ねた。

「あたしだつて、混乱してるんですよ。ねえ、万太くん」

突然話題を振られる。万太は咳払いをした。

本当は、ナノカの兄がこの場にいればと思う。しかし彼は、ナノ力に破廉恥な衣装を押しつけたかと思うと、せつせつと姿を消してしまつた。

「彼女をフォローするつもりもありませんが……、見る限り、彼女がなにも知らないというのは本当のようです。城が出現した際には驚いていましたし……それに、校門を持ち上げた力も、感情が高ぶった際の一時的なもののように……」

「そうなんですよ、机を曲げてみるとか空飛んでみるとか、いろいろいわれましたけど。なにもできませんでした」

しきりにナノカがうなづく。だから早く解放しろといわんばかりだ。転校初日に校長室に拘束されるのは、喜ばしくない事態だとうことは理解できる。

しかし 万太は、横目でじろりとナノカを観察した。

本当に、無関係なのだろうか。

彼女が驚異的な力を發揮してすぐに、あの城が出現したというのに。

「たとえ自覚がなくとも、彼女となんらかの関わりがあるというのは、充分に考えられるでしょうね」

思つたままにそういうと、ナノカが驚いたように万太を見た。

「なんで！ だから、知らないっていつてるじゃん！」

「あなたが知る知らないに関わらず、ということをいつているんですよ」

「ええ？」

それほど難しいことをいつた覚えはなかつたが、ナノカの許容量を超えたようだ。それ以上噛みついてくることもなく、眉間に皺を寄せ、どうやら言葉の意味を考えている。

「校長先生も、そうお考えなんですね？」

万太がそういうと、花島校長は肯定するでも否定するでもなく、うつむと唸つただけだった。

しかし、万太はある程度のことは理解し、そして推理していた。城が出現してから、校長室に呼ばれるまでの数十分、調べられることはいくらでもあった。しかも、花ノ富高校の生徒たちほとんど全

員があの城に興味を持ち、それぞれ協力し合つたのだ。

「何のために、彼女と僕をここへ呼んだのか、わかっているつもりです。僕は生徒会長として、彼女が誤ったを行いをせぬよう、常に監視します。それが、花ノ宮高校を守る僕の使命です」

「常に監視！」

ナノカが甲高い声をあげる。しかし万太は無視を決め込んだ。
「ですから、どうぞご安心を。あの城がいつたいなんなのか、彼女が原因に関わっているのだとして、どうすればいいのか 全力で、問題解決に努めます」

「う、うむ。君がそこまでいいうのなら……。わかった、では彼女のことは、君に任せよう」

花島校長が、重々しく述べなずく。万太は深く一礼し、踵を返した。長居は無用だ。

ちらりとナノカを見る。着いてこいと田で告げる。アイコンタクト。

しかしナノカは、まったく気づかなかつた。

「校長先生。あのお城のことなんですけど、クラスのみんなで……」

「野中さん」

少々荒々しい声で、呼びかける。ナノカは驚いて、大げさに首をすくめた。

「え？ なに？」

「校長先生はお忙しいんです。行きましょう」

「あ、そつか。はい。失礼しました！」

びしりと敬礼し、ナノカも校長に背を向ける。できるだけゆっくりと歩を進め、万太は扉を開けた。

「それでは、失礼します」

最後に振り返り、頭を下げる。

「失礼しました！」

いつたばかりだというのに、ナノカも繰り返した。そつと扉を閉め、深呼吸。

じりりと、ナノカを見た。

「馬鹿ですか」

いわすにはいられなかつた。いつてしまつてからすぐに後悔する。馬鹿だといつことはいちいち問つまでもなく明白だといつのに、なんと愚かな質問をしてしまつたのだろう。

「なんで！ どうして……校長先生に、いつちやいけなかつたの」おや、と思つた。万太の評価では、野中ナノカといつ女はもつと馬鹿にランク付けされていた。しかし彼女は、万太の言葉の意味を正確に理解し、声をひそめたのだ。

「訂正しますよう。馬鹿といつのは失礼でしたね。やや馬鹿、といつことに……」

拳が飛んだ。

万太のすぐ隣の壁に、ナノカの拳がめり込んでいた。

「つ、使えるんぢやないですか、その力」

「知らないよ、ちょっとムカつとしたら手が出ひやつたの」

「なんて危険な……！」

万太は息をのむ。ちょっとムカつとさせた程度で命が危険にさらされるとほ。

「教室行きながらでいいから、ちゃんと教えて」

ナノカはふいとそっぽを向いてしまつた。ツインテールをなびかせて、さつさと歩いて行つてしまつ。

先に行かれてしまつたのでは、教えるもなにもないじやないか。そうは思いながらも、万太は長い足を武器に、走ることなくナノカの隣に並んだ。

「僕がこれから口にするのは、推測です。推測ですが、第三者に話すのは危険ですので、あなたの心にだけ、しまつておいてください。たとえばあなたのお兄さんや、三三三さんにもです」

「よしわかつた、任せて」

あまりに軽々しい返答に、万太の胸に不安がよぎる。しかしここは彼女を信じることにしようと、腹を決めた。どのような形であれ、

彼女が当事者であることは間違いないのだ。

「あなたはこの町のヒーローだということですが……では、倒すべき敵は、だれなのですか。あなたに、心当たりが？」

「へ？」

ナノカは大きな目をまたかせた。

「えっと……町の平和を乱すちんぴらとか、んー、横暴な教師とか？」

「あなたの判断でやつづけるんですか？ そんなことをすれば、あなたが犯罪者になるだけです」

万太は息をつく。思つたとおりの反応だった。思つたとおり、彼女の脳は残念な作りらしい。

「いいですか、古来から、ヒーローといえば絶対の正義、倒すべき悪がいなくてはいけません。それは戦隊と名の付く前から、そう、スーパー戦隊と呼ばれる前から、ましてやスーパーヒーロータイムが始まる前から、決まっています」

「……え、え？」

「僕としては、リアルロボットより断然スーパーロボット、正義がいて悪がいて、悪者を倒して解決という爽快さを重要視します。まあ一概にはいえませんが……ロボットでいうのならば、そうですね、エルドランや勇者はすばらしかった。サンライズはもっと、あいつた夢のある……」

「万太くん？」

万太ははつとした。口元を押さえるが、もう遅い。

いつたい自分は、なにを口走つてしまつたのだろうか。ヒーローという言葉に我を失い、語つてはいけないにかを、語つてしまつたような。

「あ、いえ、いまのは、あくまで一般論を……」

「好きなんだねえ、そういうの」

「ごまかせる気がしない。しきりにメガネを直す。

ナノカは足を止め、まじまじと万太を観察していた。万太はいた

たまれなくなり、目線を逸らす。

堅物、校長のイヌ 等々の言葉なら、慣れている。

だがもしかして、これは……オタクとかそういうことを、いわ
れてしまふのだろうか。断じてオタクではないというのに。自分程
度のものがオタクなどと名乗つては、世のオタクたちにもつしわけ
ないというのに。

いやそうではなくて、そういう方面のことは、今までひた隠し
にしてきたのだ。万太は咳払いをした。

「と、いうようなことを、あなたのお兄さんなりいそうではない
ですか？」

完璧だ！ 心の中でガツツポーズ。なんという完璧なごまか
し術。

「うん、いいそう、いいそう。万太くんも好きなんだ。なんか、意
外だねえ」

しかし、まつたく通じなかつた。万太は必死に頭を巡らせる。ど
うにかしなければ。

「でも納得したよ！」

しかし、続く言葉は、万太の予想とは異なつていた。

「生徒会長つてだけで、そんな徹底して頑張れるもんかなつて、ち
ょつと不思議だつたんだ」

「はい……？」

話の展開が読めず、万太はおそるおそるナノカに目を向ける。
どきりとした。

ナノカは、まるで満開の花が咲いたような笑顔で、万太を見てい
た。

「万太くんは、花ノ宮高校の、ヒーローなんだね」

「……つ！」

万太は、心臓を押された。
得体の知れない衝撃。

「……？」

制服の上から、心臓をつかむ。形を確かめるかのように、慎重に。おそらく派手に、波打っていた。

あまりにも速い鼓動。

いつたい、どうしてしまったというのか。

「い、いや、僕は……」

そんなことをいわれたのは、初めてだった。ヒーローなどではないと否定したいのに、上手に舌がまわらない。彼女をじっと見つめたのでは不審に思われるかわっているのに、目が離せない。

なんという無防備な顔で、笑うのだろう。

どこも取り繕つていない、それがあたりまえであるかのような、

眩しい笑顔。

「それで、万太くんの推理は……んーと、あたしがヒーローなんだ」としたら、悪者もいるはずだ、ってこと?」

万太は我に返つた。慌てて自身の胸を数回叩く。落ち着け落ち着けと、何度も念じながら。

「そ、そういう、ことです。あなたがヒーローとしてこの高校へ現れて、すぐに城が出現した……つまりあの城は、悪の城といふことなのでしょう。ヒーローには 少なくとも女子高生ヒーローには、城は必要ありませんからね」

「なるほど。よくわかんないけど、そういうもんなんだ」

素直に、ナノカがうなずく。万太はメガネを光らせた。

「ですから、敵がいるはずです。おそらくは、この学校内に」

「ふんふん。だから、校長先生も?」

「敵ではないとは、いいきれませんからね。まあ、僕たちが調べた程度のことはすぐに向こうも調べられるでしょうが、敵かもしけないのにわざわざなれ合う必要もないでしょ?」

万太は、教室へ続く階段を上ろうとして、足を止めた。まっすぐ突き当たりまで廊下を進み、中庭へ続くドアを開ける。

そこには、竹箒で掃除をしている用務員がいた。

「おはようござります」

「やあ、おはよー」

にこやかに、返される。慌ててついてきたナノカも、おはよーございますと声を張り上げる。

「ちょっと、いいですか。空の城のことなんですが……」

万太がそう切り出すと、用務員は笑いだした。

「またそれか、なんの遊びだい？ よつてたかつて坦げうつたつて、そうはいかんよ。生徒会長も参加するなんて、よっぽどだねえ」

「ええ？ あの、おじさん……」

「いえ、それじゃあ。お掃除、いつもありがとうございます」

よけいなことをいっそくなナノカの腕をつかんで、万太はさっさとドアを閉める。

ナノカが物いいたげにこちらを見ていた。説明を求めているのだろうということはわかつたが、慌てて手を離す。

「あの人は？」

「ここのは用務員さんですよ。出勤は九時。城が出現するよりも、あとです」

簡潔に説明する。ナノカも、ひらめいたようだった。

「ということは……」

「情報を、整理しましょうか」

万太はメガネに手をあてると、にやりと笑った。

sceneー4 「冗談や遊びじゃないんだ」

ナノカは教室に戻つてすぐに、ノートを開いた。

前の学校のものを使つては混乱すると思い、今日持つて来たのはすべて真新しいノートだ。そのなかで一番気に入っている、ピンクドットのノートにペンを走らせる。

お城 わかつてること

一番上に、タイトル。

教室に来るまでの間に、万太と話したこと そして、頭の中にあることを、まとめ始めた。

出現 五月一〇日 朝八時三五分ごろ。

大きさ すごく大きい。お兄ちゃんの好きなゲームに出てきやう。 帰つたら聞いてみる！

実在？ さわれるかどうかわからない。

四つ田の を書き、ペンを取り出す。 をぐるぐると塗つづぶした。重要事項だ。

お城が出てきた時に校内にいたひとにしか、見えないっぽい。

- ・クラスのみんなも、ほかのクラスの子も、見える。
- ・先生たちにも見える。
- ・今日休んでる佐橋くんには見えないみたい（電話で呼び出して見てもうつた！）。
- ・九じに来た用も員さんにも見えない。
- ・お兄ちゃんにも見える（学校関係者じゃないけど、そのとき

いたから?)

つまり!

敵は学校内にいるだらうつて、万太くん(生徒会長!)がいつてた。

「うーん。敵……、敵かあ」

ナノカは「敵」に赤ペンでぐるぐると丸をつけた。

黒板を見る。

二・Aのみんなが一致団結して、知り合いに電話をかけたりインターネットの質問版に書き込んだり、あの手この手で調べたことが、書き出されていた。過去にも空に城が出たといつような情報は得られなかつたようだが、それでも、出現時に校内にいた人間にしか見えないらしいということは、彼らが導き出したことだ。

そのなかで、幽霊といつ一文字が、目を引いた。

幽霊を見た、という証言があつたのだ。まだ名前と顔が一致しないが、いつたのは水無月という背の高い女子生徒だ。黒板に書かれていることを、そのまま写す。

教室で幽霊を見たような気がする。水無月景子。(ちょうど)城が出現したころか、その前後)

「じゃあ、敵……が、幽霊、とか」

もちろん、関係ないかもしれない。そもそも水無月景子の気のせいかもしれない。

ほかにも、朝から腹が痛いだの、鼻炎を発症しただの、胡散臭い情報も雑多に書かれている。さすがにそれは、書き写しはしないが。ナノカは、ペンの尻で、顎をいじつた。

そもそも、なぜ、敵がいるのか。

丸をつけた「敵」の文字から、矢印を引く。

あたしがヒーローだから？

付け加え、それから考えた。

どうして自分がヒーローなのかといえば、ヒロシのいつていたとおり、幼いころにそう願ったからだ。いわれてみれば、そんなお願ひをしたようなしなかつたような。昔は、無敵なんだぞとかなんとか、調子に乗っていたような覚えもあった。だがそのあたりの記憶は、ひどくあいまいだ。五歳のころのことなどなんとなくしか覚えていないし、そのころ自分の力がものすごいものだと思っていたとしても、不思議はないような気がする。時々会う四歳の従兄弟も、オレは最強のヒーローだとなんとか叫んで、おもちゃの剣を振り回している。

「じゃあ、あたしのことも書いといつかな」

ヒーロー？

力 怪力になるみたい。強くなる？

足 すごく速く走れた。たぶん。

空 飛べない。

いつも使えるわけじゃない。よくわかんない。

書き出してみるものの、たいした情報ではなかった。

ナノカはため息をついて、ノートから視線を外す。

クラスメイトたちは、ああでもないこうでもないと、城についての議論に花を咲かせている。それは「Aだけではなく、どうやらほかのクラスでも同じようなことになっているらしい。

教師たちも混乱しているのか、未だに現れない。緊急会議でもしているのかもしれない。一応黒板には白墨の一文字が書かれていた

のだが、あつとこう間に消されてしまった。

「ナノ力ちゃん、熱心なのね」

楚々とした身のこなしで、三ツ山小亞羅が近づいてきた。

だれもが席を立ち、移動し、好き勝手にやつている。ナノ力の前のイスも空いているのを見て、小亞羅はそこに腰を下ろした。

「お城のことでしょう?」

ノートを覗いてくる。ナノ力はわけもなく、泣きそうになつた。せつかく、また小亞羅と一緒に、楽しい高校生活が始まると思つていたのに。どうして、こんなことになつてしまつたのだろう。

「どうしよう、こあらちゃん」

具体的な感情は自分でもわからいままに、弱音を吐く。小亞羅は目を見開いて、何度もまばたきをした。長い睫毛が揺れる。

「ナノ力ちゃんつたら、らしくないわ。お空にお城が出てきて、ナノ力ちゃんはヒーローで、こんなに楽しそうなことつてないじやない? どんな敵が出てきても、ナノ力ちゃんがやつつけちゃえばいいんだわ」

「敵?」

あれ、と思つて聞き返す。たしかその話は他言無用だと、万太にいわれたはずだ。

「えと……敵?」

「敵、でじょう?」

小亞羅は、赤マルのついた「敵」の部分を指さした。それはそうだ。ノートに書いてしまつたのだから、口に出さなくとも、見られればそれまで、一目瞭然だ。

「それって、素敵だと思うわ。敵、しかもこの校内、もしかしたらお友達かも……? とっても、浪漫だわ! あとは……そうね、囚われのお姫様がいたら、完璧ね。想像するだけで、わくわくしてしまわね」

両手を組んで、小亞羅がうつと空想の世界にふける。ナノ力を慰めようとしているのかもしれない。

しかしナノカは、それどころではなかつた。急いで首を回す。羽島万太はどこだろう。ぐるりと見回すと、右側直線上、廊下側の端に、羽島万太はすわつていた。しつかりとこちらを見ている。といふか睨んでいる。

「ゴメン！」

口の動きでいった。

「バレちゃつた！」

両手を合わせる。

でもいいよね！

てへ、と舌を出す。

「いいわけがないでしきう

「え、テレパシー？」

「見ればわかります！」

思わず聞き返すが、万太はあつさり否定して、憤然とした足取りでやつてくると、ナノカのノートを取り上げた。無言でざつと見て、すぐに閉じる。

「ふん」

鼻で笑つた。

ナノカの拳に力が宿る。しかし我慢する。

「預かっておきます」

絶対零度の目で見下ろして、そのまま持つて行つてしまつた。律儀に自分の席に戻つて、イスにすわる。教科書を開いて、どうやら本当に自習しているようだ。

「うう、持つていかれちゃつたよ……」

返してと食い下がつてもいいのだが、約束を破つてしまつたのは自分だ。ナノカはがつくりとうなだれる。

「かわいそうなナノカちゃん。横暴ね、生徒会長」

小亞羅が、よしよしと頭を撫でてくる。ナノカは甘えて抱きつきたい気分だつた。なによりも自分が情けない。

「ねえ、今度学校の帰りに、お買い物に行きましょう？ わたし、

素敵なノートをたくさん差し上げたいわ

「いいよ、自分で買つよ。でもお店とかわかんないから、一緒に
行こ」

「ええ、もちろん」

幼いころと同じように、小亞羅が柔らかく笑う。美少女だなあと
口には出さずにしみじみと感心しながら、買いに行くなら今日がい
いなとナノカは提案しようとする。

「いらっしゃん……」

「席につけー！」

しかし、登場した担任教師竹ノ内の怒声が、それを遮つた。

「じゃあ、またのちほど」

小亞羅が席を立ち、戻つていく。ナノカはひどく残念な気持ちで
それを見送つた。もつと話したかったのに。

「まったく、自習だといったのに」

白髪交じりのナイスガイ、竹ノ内がそういうて、黒板を消していく。
しかしその声は、呆れてはいるが真剣に怒つてはいないようだ
った。生徒たちも萎縮している様子はなく、「めんなさい」と軽く
返す声まで聞こえる。

慕われてる先生なんだろうな ナノカはぼんやりと、そう思つ
た。新しい教室、新しいクラスメイト、新しい先生。

城や力のことは気になるが、学校生活自体は普通に行われるはず
だ。とりあえずは気にしないでおこうと、一番田にお気に入りのオ
レンジドットのノートを取り出す。

「まあ……いろいろあつて遅れてしまつたが、授業を始める。それ
ぞ気をしつかり持つて、空を見ずに、取り組むよ」

ハスキーボイスで、淡々といつ。いわれてしまえばよけいに、ナ
ノカは空を見上げた。

やはり、城が見える。

「もしも降つてくるようなことがあっても、まあおやぢくは、ちょ
うどグラウンドに収まるだらう。念のため、グラウンドでの体育は

中止だ。休み時間にも、行かないようにな。城のことは気にしない、以上！」

それは、クラスでも話題になつたことだった。だが、そもそも、人によつては見ることすらできないのだから、実体があるのかどうかが疑問だ。

ナノカは、指先でぐるぐると前髪をいじつた。
とりあえずは、授業。自分にそういうきかせ、できるだけ考えないようにする。

「では、数学の問題集を出して。一七ページの……」
ナノカは、慌てて問題集を取り出した。ページを開いて、手の甲で折り筋をつける。周りを見ると、ノートを出しているもの出していないもの、まちまちだ。直接書き込むか否かは、自由なのだろうか。

聞いてみたほうが良いだろ？ かと、顔を上げる。

「……？」

眉をひそめた。

竹ノ内の様子が、おかしかつた。
まつすぐよりも、少しだけ左 どこかを、だれかを、見ていた。
あるいは、その瞳にはなにも映つていなかつたのかもしれない。
動きが、完全に止まっていた。

「先生、一七ページの、どれですかー？」

一番前の生徒が、もつともな質問を投げる。
しかし、答えはない。

竹ノ内は、ゆっくりと、首を動かした。

まるでさび付いたねじのように、ぎこちなく、目線が移動する。
その目がたしかに、ナノカを見る。

「全員、問題集を閉じて」

静かな声で、そう指示を出した。

生徒たちは不思議ながらも、やれといわれるよりはやるなどいわれるほうがいいのか、文句もいわずに閉じていく。しかしながら

力は、動けずにいた。

竹ノ内から、目が離せない。いま、間違いなく、目が合っているのだ。

「えっと……先生？」

こちらに注意を向けていることは明白だった。おそるおそる、呼びかけてみる。

竹ノ内の唇が、両側につり上がった。

「特別授業を行う。空の城についてだ」

何事もなかつたように、その目がナノカから外された。ナノカはほつと胸をなで下ろす。教師から凝視されるのは良い気分ではない。「城のこと気にするなつていつたじやん」

「なにかわかつたんですか？」

質問が飛ぶ中で、竹ノ内は力強く、拳で黒板を叩いた。しん、と静まり返る。

ナノカは息をのんだ。皆が戸惑い、怯えているのがわかる。普段はそんなことをしないのだらう。

「あの城は、悪将軍の城だ」

ワルシヨウグン……教室内がささやかにどよめいた。

「悪将軍は、世界征服をたくらんでいる。手始めにこの花ノ宮町、花ノ宮高校を手中に收めようとしている。悪将軍に逆らえば、君たちの命は保証されない」

まるで、兄の好きなヒーローもののよつな話だ。ナノカは、竹ノ内をじっと見た。

先ほどまでとはまるで別人だ。なぜ突然、そんなことをいいだすのだろう。

「しかし、心配することはない」

竹ノ内は、さわやかな笑顔を生徒たちに向けた。

「このクラスには、ヒーローがいる！　だいじょうぶだ、きっとヒーローが、悪将軍をやつつけてくれるさ！　なあ、野中…」

クラス中の全員が、ナノカを見るのがわかつた。

ナノカは硬直する。

自分が無関係ではないのだろうと、薄々気づいてはいた。万太に指摘されただけではなく、偶然にしてはできすぎだろうと、自分でも感じていた。

しかし、これほどまでに、ダイレクトにいわれるとは。

「あ、あたし、ですか？」

「もちろんだ、野中ナノカ」

竹ノ内が笑う。奇妙な笑みだ。どうしてこの状況で、それほどまでに爽やかに、笑えるのだろう。

「おまえは、ヒーローだからな。どんな敵にも打ち勝つと、信じているぞ」

「きやあああつ！」

甲高い悲鳴が、こだました。

最初は一つ、しかし一人によるものではなかつた。2 Aの女子

生徒たちが、口々に悲鳴をあげていた。

「ちょっと、なにするのー！」

「やめて！」

襲いかかっているのは、男子生徒だ。彼らは一様に無言で、うつろな目をしていた。女子生徒を羽交い締めにするもの、上にのしかかるもの、まさに殴りかかるうとしているものもいる。

それはナノカも例外ではなかつた。隣の席にすわつていた、見るからにおとなしそうな小柄な男子生徒が、両手を降り上げて飛びかかつってきたのだ。

「わわ！」

とつさにかわし、竹ノ内を見る。彼は笑顔で、教室内をただ観察している。

ナノカはぞつとした。どうこうことだらつ。どうこうつもりで、

彼はこの状況を傍観しているのだろう。

「さあ、野中！ 戰わないと、クラスメイトのピンチだぞ。これは

冗談や遊びじやないんだ」

まるで、はやく飛び箱を跳べとでもいうかのような口調で、当然のようにいい放つ。

ナノカは拳を握りしめた。

しかし、ためらう。敵ではないのだ。どう見ても、自分の意志ではないといふのに、クラスメイトになつたばかりの彼らを、殴り倒せというのだろうか。

「ナノカちゃん！」

小亞羅の悲鳴が聞こえる。彼女もまた、男子生徒に襲われていた。机の上に押し倒され、首を絞められようとしている。

「ナノカ、ちゃん……！」

「こあらちやん！」

考えるよりも先に、身体が動いた。

「こあらちやんを、離せ！」

身体をつかみ、むりやり引きはがす。そのまま持ち上げて、頭上でぐるぐると回した。

「悪、即、斬！」「

叫んで、投げ飛ばす。数人の男子生徒にクリーンヒットし、団子のようにまとめて壁に激突する。

しかしナノカは、止まらなかつた。

「あたし、怒つたからね……！」

ゆらりと両手をかまえる。武道の経験などない。しかしどうすればいいのか、本能で理解していた。

つかんで投げる。

それしかない。

「女の子たちから、離れなさい！」

床を蹴つた。男子の制服だけを目標に、次々とつかみかかる。振り回して投げつけて、の繰り返しだ。彼らも一応は抵抗したが、それはほとんど形をなさなかつた。圧倒的なパワーと、スピードの差。まるであらかじめそうなることが決まつっていたかのように、男子生徒たちはなすすべなく、放り投げられていく。

「野中さん……！」

「ナノカちゃん、がんばって！」

女子生徒たちの、応援の声。しかしナノカには、それすらほとんど聞こえてはいなかつた。

「てりや ！」

あつという間に、山ができた。

倒れ重なつた、男子生徒の山だ。

ふう、と息をつく。

額の汗を拭つた。

「まだ立てるやつは、かかつてきなさい！」

机の上に仁王立ちする。女子生徒たちが歓声をあげた。

「かっこいい ！」

「ナノカ ！」

それほど、悪い気はしない。ナノカはえへへと頬をかく。

「あなたは、馬鹿ですか……」

積み上げられた山の、下の方から這いだして、弱々しい声がいつた。

「あ、万太くん」

万太は激しくせき込んで、転がつていた眼鏡をかけ直す。それから、教卓の向こう側、腕を組んで様子を見守つての竹ノ内を、指さした。

「まだ、終わりじゃないでしょ……！」

「え。あ、先生？」

しかし、それで終わりだつた。

竹ノ内は、まるでゼンマイが切れたかのように、足下から崩れ落ちた。顔から床に激突し、がつんと重い音がする。

そしてそのまま、動かなくなつてしまつた。

「せ、先生……？」

ナノカが近づこうとしたが、それを制して万太が慎重に近づいていた。復活したほかの男子生徒が、さつと筆を差し出す。万太は

幕の先で、竹ノ内をつづいた。

反応がない。

ナノカが竹ノ内に脇に座り込み、うつ伏せに倒れていた彼をえいやと仰向けにさせる。

白目を剥いていた。氣を失っているのは明らかだ。
「彼が黒幕というよりは……だれかに操られていたと考えるのが、自然ですね」

ごく冷静に、万太がいう。

「どうしたの、いつたいなにがあつたの！」

けたたましい声と同時に、ドアが開け放たれた。2 Bの担任福

原夏美が、ずっとドアを開けようとしていたらしい。

彼女は、2 Aの惨状に、息をのんだようだつた。

それはそうだろう。イスや机はめちゃくちゃに倒れ、男子生徒のほとんどは未だ山となつており、竹ノ内は氣を失っているのだ。

「どういうこと？」

そういわれても、どう説明すればいいものか。

2 Aの面々は、それぞれ不安げに顔を見合させた。

scene_5 「心を、ひとつ」

「ただいまー」

聞こえた声に、野中ヒロシは玄関まで全力疾走した。愛しい妹を、両手を広げて歓迎する。

「お帰り、ナノカ！」

「おじやまします、お兄さま」

「おじやまします」

しかし、ドアを開けて入ってきたのは、ひとりではなかつた。

愛しの妹がいるのは当然だ。

その幼なじみであり友人の三ツ山小亞羅が共にいるのも、うなずける。

問題は、もう一人だつた。

「羽島万太です。突然もうしわけありませんが、どうしてもお兄さんからお話をうかがいたいと思いまして」

丁寧に頭を下げ、メガネを押さえながら、淡々といつ。

この男には、見覚えがあった。今朝、ナノカと校門で一悶着起こしていただやつだ。ナノカにはいえないがこつそりあとをつけて一部始終を録画していたので、まちがいない。

そこの背が高く、声が低く、もやしとくつぽどにひょろりとしているわけでもなく、なによりも頭脳明晰を絵に描いたような男。そして礼儀正しい。

「敵か！」

ヒロシは直感した。こいつは敵だ。しかもお兄さんなどと。どこの馬の骨ともしれない男に、お兄さん呼ばわりされる覚えはまったくない。

「ええ、そのことについても、もちろん」

なに食わぬ顔で、羽島万太は肯定する。

ヒロシは、かつと頭に血がのぼるのを感じた。

「こいつは、いまここで、倒しておかなければならぬ」 ヒロ

ー（マニア）としてのソウルが燃えさかる。

「あとは、ナノカさんの幼いころの話なども……」

「お兄ちゃんは、認めません！」

ヒロシの手が真っ赤に燃え、万太を倒せと轟き叫ぶ。

しかし、ひょろひょろと飛び出したヒロシの渾身の一撃は、ナノ力の一撃によつて完全に止まつた。

「お兄ちゃん、どいて」

正確には、喝などではなかつた。日常のシーンで見られるただのお願ひだ。

しかし、ヒロシは激しく田を見開く。ナノカのテンショング明らかに低いのを、兄として感じ取つたのだ。その証拠に、いつも元気なツインテールが垂れ下がつてゐる。

「ナノカ、どうしたんだ？ 兄ちゃん今日、レーズンバターサンド買つてきたぞ。おまえの好きなキムラのやつだぞ。よし、日本茶を入れよう！ 待つてろ！」

「うーん。食べるけど」

歯切れが悪い。ヒロシはゆつくりと首を左右に振つた。

「なんてこつた……ナノカ、いつたい、なにがあつたんだ？」

「お兄さまもご覧になつたでしよう。今日、お空にお城が出現したんです。ナノカちゃんはもうてんてこまいりで、それはもう大変な一日を過ごしたんですよ」

「城！」

ヒロシは手を叩いた。

空に城 たしかに見た。まちがいない。これは大ニュースだと思いつつ職場に戻り、いやあ大変なことになりましたねえと話題に出したが、おかしなやつ呼ばわりをされただけで終わつたのだ。幻か気のせいか そういう類のものだと思っていた。

「え、あれ、マジで？」

三人が、うなづく。

ヒロシのトランションが、いつきにマックス値にまで跳ね上がる。

「うおおー、ということはあれか、魔王の城か！　ナノカ、やつたな！　倒すべき敵が現れたんだぞ！」

「お兄ちゃん、ちょっと黙つて。あたし、着替えてくるから、一人とも休んでてね」

「んん……！　よし、黙ろう！　そしてもてなそうー。」

ヒロシは宣言して、いそいそと茶の用意を始める。転入初日、疲れているであろう妹のために、今日は早退してきたのだ。ナノカの好きなブレンドティーは用意済みだつたし、夕食の下ごしらえまで完璧だつた。同じ理由で朝は遅刻しているので、ほとんど仕事をしていないわけだが。

野中家はそれほど広くはない。2LDKの、どこにでもある賃貸アパートだ。ナノカの自室といつものも一応は存在するが、三人が座つてくつろぐほどのスペースはないため、ヒロシはリビングテーブルに茶を並べた。買い占めたレーズンバターサンドも器に盛る。

「せや、どうぞ、小亞羅ちゃん」

クッショוןを置き、小亞羅を促す。

「ありがとうございます、お兄さま」

にこりと笑つて、小亞羅は清楚な仕草で腰をおろした。

「帰れ！　といいたいところだがすわ。ナノカの優しさに感謝するんだな！」

万太には敵意むき出しで告げる。万太はまったく動じることなく、ありがとうござりますと余釈をした。ヒロシの示すままに、小亞羅の隣にすわる。

「……どうして、生徒会長まで一緒にくる必要があつて？」

小亞な声ではあつたが、小亞羅がとげとげしいいのかたをした。

ヒロシはびくりと耳を大きくする。

「いつたでしょ、お兄さんに聞きたいことがあるんですよ。野中

さん、ヒーローとなつたときのことや、その当時のことです」

「それはわたしが聞いておくから問題ないわ。そもそも、生徒会長

はナノカちゃんと仲良しでもなんでもないでしょう。男の子がいきなり家にくるなんて、ナノカちゃんの迷惑を考えたらどうかしら」

「……む、迷惑、なのでしょうか?」

「あたりまえだわ。ナノカちゃんはわたしといちやいちやするはずだつたのに」

ヒロシは想像した。ナノカと小亞羅のいちやいちや。それは大変に素晴らしい。

「生徒会長は邪魔をしたかつたのかしら? ナノカちゃんを誘惑でもしたら許さなくてよ」

ヒロシの耳がさらに巨大化した。

誘惑だと?

「今朝からべたべたしちゃつて。よろしくないわ。あなたがナノカちゃんに恋をするのは勝手だけれど」

「な、そ、そんなはずがないでしょ! 僕は生徒会長として、いえ、2 Aの一員として、積極的に事態の解決を……」

「ふん、イヌ」

「…………つ!」

ヒロシは心の中で腕を組んだ。なるほどひとつなずきながら、ナノカ周辺人物相関図を描いていく。どうやらこの二人はあまり仲が良くない というよりも、小亞羅が一方的に敵視しているようだ。

「お待たせー」

そこへ、ナノカが合流する。ジーンズのスカートに白いシャツという、ラフな出で立ちだ。ヒロシは心の中でガツッポーズをとる。我が妹よ、なにを着てもかわゆし。

「ねえ、あたしね……今日あれからずっと、考えてたんだけど……」

いつになく真剣な、思い詰めたような表情だ。

ヒロシはナノカの分の茶を運ぶのも忘れ、妹に見入る。いやな予感がした。

「あたし、ヒーロー、やめられないかな」

「ナノカちゃん!」

小亞羅が立ち上がる。ヒロシは声も出なかつた。

しかし、驚いてはいなかつた。そんな気がしていだ。

「ナノカちゃん、なにをいつているの？ セツカグ、この町に帰つて来られたのに……」

「当然ですね」

万太は冷静だ。まるで、「うなる」ことがわかつていていたかのようだつた。

「あの城の存在や、今田のクラスでの事件……それがもしかしたら、自分と関係がある それどころか、自分のせいかもしないのならば、その考えに行き着くのは当たり前でしょう」

「でもそんなの……もし、ナノカちゃんと関係がなかつたらどうするの！ ナノカちゃんがヒーローではなくなつたとして、それでもお城はあのままかもしれないでしょう？」

小亞羅は必死だ。ヒロシは彼らの会話から、クラスでの事件とやらを想像する。なにか、ナノカにとつてよからぬことがあつたのはまちがいない。

「あのね、でもね。あたしがヒーローじゃなくなつて、それで解決するなら、それがいちばんいいと思つの」

「そんなの……！」

小亞羅の目が潤んでいた。ヒロシは兄としてこの場をどうにかしようと思うが、どうすればいいのかわからぬ。そもそも小亞羅がなにに打ちひしがれているのかも、いまいちつかめないので。

それでも、知つていることは告げねばならないと責任感が疼く。ヒロシは小亞羅を見据えた。

「小亞羅ちゃん。ナノカはね、昔……」

「お兄さまは黙つていてくださいー。これはわたしとナノカちゃんの問題です！」

「はい」

ヒロシは黙つた。一瞬にして、ヒロシと万太は蚊帳の外に追いやられてしまつた。

「」あらちゃん……あたし、小さいころ、本当にヒーローだったの？ なんかね、どうすればいいのかわからないの。急にヒーローみたいな力が使えるようになつても……」

「ナノカちゃんはヒーローだったわ！ いつだって、わたしを助けてくれたわ！ それに、ヒーローになりたいと願つたのは、ナノ力ちゃんでしょう？」

緊迫した空氣だ。

ヒロシはとりあえず、すわつた。

万太と一瞬だけ瞳を絡ませ、うなずき合ひ。これは口出しできないよねー、とアイコンタクト。

「そんの……そんの、ナノカちゃんひじくないわ。ヒーローをやめたいだなんて」

「あたしらしくないって、どうして？ あたしにままでずっと、ヒーローなんかじやなかつたよ？ 小さなじつとは覚えてないし

……」

ナノカは瞳を伏せた。ほんの一瞬、いいにくそうに息を切る。「……どうすればいいか、わかんないよ。悪将軍を倒せ、とか」

「 つ！」

小亞羅の瞳から、涙があふれ出す。

しかし緊迫した空氣をよそに、ヒロシはがつつり反応していた。なんだワルシヨウグンて。やばい超かつこいい。

「ナノカちゃんの……ナノカちゃんの、バカ ！」

拳が飛んだ。思いのほか鋭い右ストレート。ナノカの頬にクリーンヒットする。

小亞羅はそのまま、鞄をつかんで立ち上がった。お邪魔しましたと叫んで、野中家から出でていってしまった。

「」あらちゃん！

当然のように、ナノカがそれを追う。

ガチャ、バタン。

ガチャ、バタン。

一回続く音。

そして残る、どうしようもない静寂。

「これと一人とか…」

ヒロシは心から叫んだ。どうしたこうの、この状況。「いえ、問題ありません、お兄さん。むしろ好都合といつていいでしょ？」

「ないよ？ オレその趣味マジでないよ？」

「どの趣味ですか？」

「ぐく淡々と問われ、ヒロシは我に返る。そつだ、落ち着こう。こいつは敵だ。自分のポジションを思い出す。

しかし同時に、ナノカの兄としての威厳も維持する必要があった。今更ではあつたが胸を張り、ごほんと咳払いをする。

「つまり……オレの屍を越えていこうと、そつこう」とだな？」

男前にいった。

「違います」

「あ、違うんだ」

「ここで初めて考える。そして、思い出した。

最初から、聞きたことがあるといつてていたはずだ。

「で、聞きたいこと、とは……？」

シリアルスにいった。

呼応するように、万太のメガネが光る。

「妹さんの、力のことです。彼女がいつていたとおり、空に出現した城は、ナノカさんと関係が深い可能性が高い。彼女がどうしてヒローになるに至つたのか、お兄さんの知つている経緯を、教えていただけませんか？」

「ふうむ……経緯ね。いいけど、オレもガキだつたからな。記憶の混乱がないともいいきれん」

ヒロシは立ち上がった。

窓辺に寄り、赤く染まりゆく空を見つめる。遠いあの田舎、思いを馳せる。

「だが、そうだな……ナノカの協力者になつてくれるといつのなら

」

左手を腰にあてた。

勢い良く、振り返る。右手は親指と人差し指を立てて、顎の下に設置して決めポーズ。

「説明しよう！ ナノカは幼きあの日、ナゾ仮面と契約をした。それにより、野中ナノカは、花ノ富町にいる間だけ、超人的なパワーを発揮することが可能となつた。この地を離れて十二年、もはやあの力は失われたかに思えたが、そうではなかつた！ つまりナノカは、花ノ富町限定、美少女ヒーローだつたのだ……！」

だー、だー、だー。

完璧な口上が、こだまする。

もちろんリアルにはこだましないので、小さな声でヒロシが付け加えていた。かつこよさ演出といつやつだ。

「それはもう、聞きました」

万太はまったく冷静だつた。

「まず、ナゾ仮面というのは何者ですか？ 契約といつのは？」

「ああ、そういうことね。じゃあ最初からそう聞けよー。なんだよもー」

ヒロシはぶつぶつとぼやきながらも、よいしょともとの位置に腰をおろす。

「ナノカが五歳で、オレが十三のときだな。ナノカを公園で待たせといて、オレだけ近所のコンビニにあんまん買いに行つたんだ。ナノカが食べたいつていうからさ。そしたらそのとき、会つたらしいんだよ」

「会つた、といふと？」

「ナゾ仮面に」

「…………」

万太が微妙な顔をして黙る。そんな顔をされても、嘘偽りをいつているわけではないので、ヒロシにはどうしようもない。

「や、なんか名乗つたらしいけど、それは忘れた。黒い仮面してたつてのは、ナノカがいつてたからまちがいない。そんで、魔法でなりたいものにならせてやるから、なにになりたいかいつてみろ、みたいなことをいわれたらしい」

「不審者じやないですか」

ヒロシは深くうなずいた。

「不審者だな」

それは疑いようがない。仮面をつけて少女に近づき、「魔法が使えるんだよー」などと、即通報レベルだ。

「それで、ナノカさんは、ヒーローになりたいと?」

「そうだ。まあ、オレがヒーローもんばっかり見せてたからな。この町を守るヒーローになりたいつつて、その結果が、花ノ宮町限定のヒーローってわけだ。実際引つ越してこの町を出てからは、超人的な力は使えなかつた」

「なるほど……」

万太はなにやら考え込んでいるようだ。つられるようじ、ヒロシもあのころのナノ力を思い描く。

「かあわいかつたなあ……」

当時五歳のナノカは、まさに無敵のヒーローだった。立ち向かえないものなどないと思つていたことだろう。事実、大人を相手にしても負けることなど決してなく、正義感に溢れていた。

「ナノカさんは、自分がヒーローだつたということを、覚えていいないようですが?」

「ああ……」

ヒロシの表情が、曇る。

それには、心当たりがあつた。彼女がこの町に戻つてくることになつたとき、またヒーローとしての力が蘇るんじゃないかという期待もあつたが、不安があつたことも事実だつた。

だからこそ、コスチュームやテーマソングまで用意して、それでもナノカにはなにもいわなかつたのだ。なかつしたことになつたのな

ら、それでいいと思つていた。

「引っ越しした先でな……まあ、ヒーローのつもりで、色々無茶しようとしたんだよ、あいつ。でも新しい町ではヒーローになんかなれなくて、ただの非力な女の子でさ、なんにもできないのにでかいことばつかりいもんだから、まわりからは煙たがられて……要するに、友だちができなかつたわけだ。いじめつてほどでも、なかつたけどな。かわいそうに、長いことふさぎ込んでたから……身を守るために、忘れちまつたんじやないかな」

膝を抱えて、一人で泣いていたナノカの姿は、いまでも忘れられない。嘘つきと罵られ、毎日のように泣いていた。

「小亞羅ちゃんは、しょっちゅう手紙送つてくれてさ、ナノカの心の支えになつてくれたんだよ。オレにこの町での職場を紹介してくれて、ナノカが戻つてくれるよう取りはからつてくれたのも、小亞羅ちゃんだ。あの子はたぶん、ヒーローのナノカに、憧れみたいのがあつたんじやないかな。だからあんなふうに、怒つたんだと思つ」

「そうこうことですか……」

万太がメガネを押さえる。

知つてることばつこれで全部だといいかけて、ふと、ヒロシはひつかりを感じた。

自分で何度も口にした、「契約」という言葉。改めて考えれば、思い出すものがあつた。

そんなものはナノカの聞き間違いか、それともナゾ仮面のはつたりか……たいして問題ないだろつと思つていたのだが。

「その代わり、心をひとつ

ぱつりと、つぶやく。

「それは、なんですか？」

ああ、ヒロシは返事をして、ヒツセヒツセカソツとした。しかしこの重大性に、結局は話すことにする。

「あの日、ナノカがいつてたんだ。ヒーローになる代わりに、心を

取られたって。でもナノカはあのとおり、まったく普通だから、気がしてなかつたんだが……」

「心を、ひとつ」

万太がうなる。ヒロシはナノカと過ごした日々を思い出すと、記憶を探つた。

失つている心など、本当にあるのだろうか。気づいていないだけで、もし本当にナノカがなんらかの心を失つているのだとすれば、それは大問題だ。

心を失うということのは、どういうことなのだろう。

「こまでに失つてはいる、か……それとも、ヒーローとしての力を使うことで、失う？　いや、違うな。ナノカの願いはすでに叶つてるんだから、すでに心がひとつなって考えるのが、妥当か」

そういうながらも、釈然としない。

ヒロシにとつて、ナノカは完璧だ。足りない心など、思いつかない。

「もしかすると……その心を取り戻せば、ナノカさんはヒーローじゃなくなるのかもしない」

万太のつぶやきにうなづきながら、しかしヒロシは考えていた。小亞羅のいうとおりだ。

もしそれでも、あの城が消えなかつたとしたら、この町はどうなるのだろう？

小亞羅は走った。無我夢中で、走った。どこに向かっているかなど考えず、ただナノカが追いつけないように、懸命に足を動かす。冷静に考えれば、家のものに電話を入れればすぐにでも迎えが来るはずだったし、ほかにもたとえほどこかの店に入つて隠れるとか、方法はあるはずだった。しかし気が動転していて、とにかく悲しくて、走ることしかできなかつた。

「逃げないで、こあらちゃん！」

すぐうしろで、ナノカの声。

小亞羅は、立ち止まつた。

逃げきれるはずなんて、なかつた。そんなこともわからないほどに、感情が高ぶつていた。

肩で息をして、振り返る。ナノカはまつたく息を乱した様子もなく、そこに立つていた。空は赤い。この町に彼女が立つてゐる、ただそれだけで泣きそうになる。

「ナノカちゃん……」

小亞羅の声が、震えた。涙が流れそうになるのを、ぐつとこらえる。

小亞羅はナノカの肩をそつと抱き、よしよしと頭を撫でた。おやおやおそる、ひどく纖細なにかに触れるかのように。

小亞羅は力が抜けて、小さく笑つた。いつの間にか、公園のすぐ近くまで來ていたことに気づく。意識していない、まつたくの偶然だつたが、小亞羅はこれは好都合なのではないかと思つた。

「ねえ、ナノカちゃん。あそこで、お話ししましょう？」

公園を指す。まだ何人かの子どもたちと、その母親らしい人影がある。

いつかのようだに、ナノカが一人になることはない。

「うん、いいよ」

「ふふ、決まりね」

小亞羅は手を伸ばし、ナノカの手を取った。にこりと笑つて、公園へ歩を進める。幸い、ベンチは空いていた。

腰を下ろし、ナノカを見る。彼女の方が十センチほど背が高いので、見上げる形になる。

ナノカはどこか居心地の悪そうな顔をしていた。小亞羅は首をかしげる。

「どうしたの、ナノカちゃん」

「どうしたの、つて……」

ナノカは指で髪をいじった。いににくそう、といつよりも、いににくいですという感情が全身からにじみ出ている。

そういう、嘘のつけない、ごまかしのできない性格も、小亞羅は好きだった。変わつてないなと思いながら、静かに待つ。

「あの、ね。もう、怒つてないの？」

やがて、意を決したように、ナノカがいつた。
いににくいことほど小さな声になるのだが、ナノカの声はきつぱりとしていた。そういうところも、昔のままだ。

「怒つてるわ」

「えええ」

即答すると、ナノカの顔が情けなく歪む。

「あたし、こあらちやんに嫌われたら、この町にいる意味ないよう」「ナノカちゃんつたら、そんなのズルいわ。怒れなくなるじゃない」「冗談ではなく、小亞羅はいう。ナノカがいなくては意味がないのは、自分だつて同じだ。

いや、正確には、「同じ」ではない 小亞羅には幼いころからずっと、搖るがない、譲れないものがある。

自分のナノカへの思いは、それ以上だ。

ほかの誰よりも、たとえばあの変態の兄よりも、ナノカを想つている自信があつた。

「ナノカちゃんはね、わたしのヒーローなの。あのね、ヒーローと

しての力があるからとか、そういうんじゃないの。ナノ力ちゃんはとにかく、わたしにとつて、特別なのよ

わかつてもらいたいというよりも、ただ伝えたかった。しかし案の定、ナノ力は困ったように眉を下げる。

「こあらちゃん……」

「仕方がないわ。だつて、そなんだもの」

小亞羅は、ナノ力の笑った顔はもちろんだが、困った顔も、怒った顔も、全部が好きだった。もうしわけないと思いながらも、笑みをこぼす。

「それにね……さつきもいつたけど、わたし、やっぱりナノ力ちゃんがヒーローじゃなくなつたとしても、あの城は消えないんじゃないかって思うの」

小亞羅は、空を見上げた。

それほど遠くない空に、依然として浮かぶ城。ちょうど花ノ宮高校の上空だ。

「でももし、あたしのせいだつたら……」

「もし、ナノ力ちゃんのせいでもなくて、あの城をなんとかできるのが、ナノ力ちゃんだけだつたら？ だつて、本当にナノ力ちゃんのヒーローになるという願いに呼応しているなら、もつと昔、わたしたちが五歳のころから、なくちやいけないはずでしきう？」

ナノ力が目を見開く。その可能性は考えなかつたようだ。

「そつか、そつかも」

「それだけじゃなくてね」

小亞羅は、視線を下げる。ちょうど、最後の親子連れが、公園を出していくところだった。これでここには、ナノ力と小亞羅の二人だけだ。

小亞羅は、ナノ力がヒーローとなつたあの日、現場に居合わせたわけではなかつた。しかしながら聞いた話は、一生忘れられないだろうと思った。

何度も何度も、想像した。

この公園で、どんなやりとりがあつたのか。

「ナノ力ちゃんがヒーローになりたいと願つたように……だれかが、悪將軍になりたいと願つたという可能性は、ないかしり

「あ……！」

思わずといった様子で、ナノ力が立ち上がつた。

「こあらちゃん、頭いい！」

叫んで、それからすわり直す。そんな慌ただしさも懐かしく、小亞羅は思わず微笑んだが、それから首を左右に振つた。

「わからないわよ？ あくまで可能性の話だもの。でも、ナノ力ちゃんがヒーローになつたことと、まったくの無関係つてことはないと思うの。どちらも荒唐無稽だし、それにどちらも地域が限定されている。これって、似てるわ」

「うん、うん、本当だね。そつか、そだつた場合、あたしがヒーローじゃなくなつても、悪將軍は残るよね……」

「それどころか、悪將軍の天下になるでしょ？ ね。どうやら、ナノ力ちゃんを敵視しているようだつたから……つまりね、悪將軍を止められるのはナノ力ちゃんしかいないつて、そう思つてゐるの、わたし

し」

「つづん……」

顔を前に突き出すようにして、ナノ力がうなる。小亞羅は思つたままを告げただけだつた。それでもヒーローをやりたくないというのなら、それはもうどうしようもない。あくまで、ナノ力の決めることだ。

「じゃあ、ナゾ仮面に、聞きたいよね」

悩んだ末に、ナノ力がつぶやいた。

「ナゾ仮面？ それつて、十一年前、ナノ力ちゃんをヒーローにした？」

「そう、それだよ。ナゾ仮面がだれかを悪將軍にしたかもしないんだつたら、ナゾ仮面に聞いたらわかるよね。解決！」

誇らしげに胸を張る。田が光った氣すらした。

「そ……それは、そうかもしないけど……どうやつて会つの？」

「呼ぼうー」

一切の迷いなく、ナノカは叫んだ。立ち上がり、拳を握りしめて、希望に満ちあふれた表情で小亞羅を見下ろす。

「最初に会つたのも、この公園だつたもん。きっとこの近くに住んでるんだよー」

「そ……そらから」

小亞羅としては、そう言葉を濁すしかない。彼女のこの自信は、いつたいどこから来るのだろう。

しかし、ナノカは不安げな小亞羅をよそに、公園の中央まで走り出た。大きく大きく、息を吸い込んでいく。

「ナ……ナノカちゃん？」

空気が動くのが、わかつた。

公園の中心に向かつて、吸収されていく。田大な空気の流れが、はつきりと田に見える。それらすべてが、どんどんナノカの肺に入つていく。

「！」

小亞羅は察した。とつさにきつくな耳を塞ぐ。

「出ーーてーこーーいー！ ナーゾーかーめーん ！」

とても、人の声とは思えなかつた。

びりびりと空気が震える。声の波が肌を撫で、遠ざかつていく。

ナノカの声は、町全体に届いたのではないかと思えるほどだつた。家々を越え、長い時間をかけて、遠くへと響きわたつていく。

「ナノカちゃんつたら……」

加減というものを知らないのだろうか。知らないのだろう。それがナノカだ。

小亞羅は両手を耳から離した。まだ、耳がびりびりしていた。耳のすぐ内側で、膜が張つたような違和感。鼓膜はだいじょうぶかしらと本気で憂える。

しかし、ナノカの大声は、ただの大声では終わらなかつた。彼女のもぐろみ通り、確かな結果を生んだ。

「なんだい、そんな大声で……そんなにこの美しき闇商人に、会いたかつたのかな？」

飘々とした声とともに、どこからともなく人影が現れる。

燕尾服に、黒い仮面。

小亞羅は思わず立ち上がつた。

「怪しいおじさん！」

ナノカが叫ぶ。仮面の男は両手をあげ、大仰に首を振つた。

「はつはつは、お兄さんは美しき闇商人、Ｊ・Ｊだ。まさか忘れたわけではないだろ？」

「じえいじえい……？ そんな名前だつたつけ？」

仮面の男をからかうつもりも、ましてや怒らせるつもりもないのだろうが、ナノカが当たり前のようになつてやう問い返す。Ｊ・Ｊはこめかみを押さえ、黙つた。

「……まあ、とにかく、今後私を呼ぶときにはもう少し控えめに頼むよ。この近所に住んでいるんでね、そんな大声を出さなくとも聞こえる」

「やつぱり！」

ナノカが嬉しそうに両手をぐつと握りしめる。誇らしげに振り返る姿に一瞬くらりと脳が揺れたが、小亞羅はナノカに駆け寄ると、シャツの袖を引いた。あまり近づくなと、仕草で伝える。

「こうやってここに現れたということは……ナノカちゃんに、協力してくれるつもり？」

ナノカとは対照的に、小亞羅は好戦的だ。Ｊ・Ｊは仮面の奥で、おもしろそうに赤い目を細める。

「どうかな。私にできることなら考えるが……私は商人だからね。もちろん、対価を要求するよ」

「悪将軍を生んだのつて、おじさんなの？」

「話聞いてたかな、お嬢ちゃん」

さすがの闇商人も、ナノカには手を焼くようだ。小亞羅はとりあえず、ナノカに任せることにする。

「教えてくれるぐらい、いいじゃん」

ナノカは一ミリも引かなかつた。かといって、交渉する様子もなかつた。『ごり押し』だ。

「よくないさ。まあ、といつても……私が欲しいのは美味な心。もう、願いを叶えてしまつてはいるからね。これ以上、欲することはできなーいな」

Ｊ・Ｊがどこかおもしろそうにナノカを見下ろす。ナノカは真剣にうなつた。

「じゃ、どうすればいいかな。わかつた、おじさんが商人だからいけないんだよ。まずお仕事変えよう！」

「……いやいやいや」

Ｊ・Ｊは腕を組んだ。一度ナノカから視線を外す。

遠くを見て、深呼吸。リフレッシュしたのか、振り返つたときにはポーカーフェイスを復活させていた。

「用がないなら、お兄さん帰るけど」

しかし、心が折れていた。ナノカは頬を膨らませる。

「なんで！ 質問に答えてないじゃん！ 拳？ 拳で語り合つ？」

ヒートアップ。小亞羅は心中でナノカを力一杯応援する。ナノカが昔好きだったアニメでは、どんなときでも拳で語り合つのがモットーだった。小亞羅ももちろん、ＤＶＤボックスを持つている。

「いけ、ナノカちゃん！」

勝てる！

「ちょ、ちょっと待つてもらおうか」

『冗談ではないとわかつたのだろう、Ｊ・Ｊの声に焦りが現れた。

「私は武闘派ではないんだよ。そもそも、君をヒーローにしたのは私だ。拳で来られたら、ひとたまりもないことは私がだれよりもよく知つている」

「いい残しておきたいことは、それだけ？」

ナノカの拳はすでに燃えていた。

「・」の表情がこわばる。仮面の下で、筋肉がひきつるのがわかる。

「たとえばの話をしよう、落ち着きたまえ、お嬢さん」「三、二、一、……」

「いや、だから… たとえば「」で私の命が尽きても、一緒にだからね？ なんの解決にもならないからね、わかる？」「ナノカは、拳をおろした。

首をかしげて、そのままうしろを見る。小亞羅はそんなナノカと瞳を合わせ、うなずいた。

「つまり……たとえあなたが亡くなつても、ナノカちゃんはヒーローのままだし 悪将軍も、いなくならない、と？」

さりげなく、悪将軍のことも付け加える。それどころではないのか、「・」はあつさりとうなずいた。

「や、そういうことだ。その二つはもつ、成された契約だからね。私の意志や、ましてや命とは関係がないんだよ」「

「・」は両手を前へ突き出し、ストップをかける体勢で必死にいう。ナノカと小亞羅が黙つてしまつて、咳払いをして、取り繕つよう蝶ネクタイの歪みを直した。

「……わかつて、いただけたかな？」

必要以上にダンディに、ポーズを取る。小亞羅がうなずき、ナノカは反対側に首をかしげた。

「なりたい姿にならせてもらつたら、それってずっとそのままなの？ それとも……元に戻る、戻す方法が、あるの？」

「では、ヒントを」

「・」は、すっかり自分のペースを取り戻したようだった。唇の両側を上げて、にやりと笑う。

「対価は、決まっている。それを見つければ、あるいは……」「それと、おじさんは何者なの？」

「本当に話を聞かない子だね」

Ｊ・Ｊは肩をすくめたが、どこかおもしろがつていいようでもあつた。笑みの形のまま、口を開く。

「私は美しき闇商人だ。それ以上でも、以下でもない。私が何者はたいした問題じゃないさ……君たちの力と私とは、もはや無関係なのだからね」

仮面と口とが、浮かび上がつたような気がした。

ナノカも小亞羅も、目を奪われる。一瞬、脳が麻痺するような感覚に陥る。

唐突に、まるで二人を呼び戻すかのように、けたたましく着信音が鳴り響いた。ナノカと小亞羅が幼いころに放映された、ヒーローアニメの主題歌だ。前奏からがつづりと、大音量で流れしていく。

「ナノカちゃん、お電話が……」

「わわ、はいはいっ！」

ナノカは慌ててスカートのポケットを探る。画面には「お兄ちゃん」の文字が輝いていた。

あの兄か　　盗み見て、小亞羅は内心で舌打ちする。せつかく、ナノカとナゾ仮面の対峙という、おいしい場面だったのに。

ナノカが通話ボタンを押し、話し始める。

小亞羅は顔を上げ、そして気づいた。

いつの間にか、Ｊ・Ｊは姿を消していた。

羽島万太は、パソコンをチェックしていた。

野中ヒロシと話しているうちに、万太のヒーローマニアぶりもしつかりとばれて、二人は意氣投合 とういつより、どうやらヒロシがある程度万太を認めたようだ。そうして、一人の意見は悪将軍を成敗しようという方向でまとまつた。万太は花ノ宮高校の平和のため、ヒロシは妹ナノカの身の安全のため。最終的な目的は違えど、悪将軍をどうにかしなければならないというのは同じだ。

今日一日の学校でのでき」とを聞き、協力すると宣言したヒロシの行動は、実に早く、鮮やかだつた。目にもとまらぬ早さでキーボードを叩き、「花ノ宮高校・城対策ＨＰ」を開設。城や悪将軍にして現在わかつてている情報を、ナノカのノートと万太の話を元にまとめあげ、さらに掲示板を設置し、ＵＲＬとパスワードを 2 Ａ全員にメール送信した。ほかのクラスについては今後どうするか考えていくらしいが、「オレさ、住所とメアドと誕生日押さえてるの、ナノカのクラスメイトだけなんだよね」という理由で、2 Ａだけにとどまっている。なぜそれだけの情報を押さえているのか、それつて犯罪なんじやないだろうかと万太は思つたが、黙つておいた。平和優先だ。

「なんか情報、出てるか？」

フリルエプロンをはためかせ、ヒロシがディスプレイをのぞきこんでくる。どうやら夕飯の準備中らしく、良い香りが漂つてきていた。万太は身を引きながら、うなづく。

「出でますね、掲示板に何件か。やはり家族に話しても信じてもらえなかつた、等のものと……あと、興味深いのは、これです」「どれどれ」

万太がマウスのカーソルで示すと、ヒロシはそれを読み上げた。

「『オレ幽靈見たマジで見た』？」

津田真一の書き込みだった。お調子者ではあるが、嘘をつくより
なタイプではない。

「幽靈を見たところのは、今日水無月さんもこつていましたし、こ
つちにも……」

津田真一への返信といつ形で、投稿があった。画面をスクロール
させる。今度はクラスでも比較的おとなしい、八代友人の書き込み
だ。

「『ぼくも見た。形のないお化けみたいな。気持ち悪い。時間はた
ぶん四時ぐらい。そつちは何時?』……で、返信が、『一時ぐら
いに学校で』、か」

ヒロシがうなる。万太はその続きを読みながら、幽靈について考
えていた。水無月景子が見たといつては、十時ぐらいだったた
だろうか。これらすべてが嘘といつことは、まずないだろう。

「こつちは、家でひとりでいるときに、とありますね。全部で三人
です。まだ増える可能性もあるでしょ? つか……幽靈田撃情報で、
新しくスレッドをたてたほうがいいでしょ? うか」

「いや、それするとガセが増えそうだな。本当に見たヤツは掲示板
舐めるように見て食いついてくるだろ、そのまんまでいいよ」

いやに頼もしい。そうですが、と万太は素直にうなずく。パソコン
を使つようなことは、万太はあまり慣れていないのだ。せいぜい
学校で使う程度といったところだ、寮の自室にはもちろんパソコン
などない。

「それにしても、幽靈ねえ。よし、ちょっとこじつてみるか
ヒロシがキーボードに手をのばす。万太はイスから立ち上がり、
パソコンの前を譲つた。

「『髪の長い女の幽靈なら、オレも昔見たことある』『あ
野中ヒロシとすばりそのままの名前で、書き込む。』

「本当ですか?」

「本当のこと書く必要ないだろ、こじで」

聞くと、あっさりと返された。まったくそのとおりだ。

ちょうど掲示板を見ていたのだろう、ほどなくしてレスがつく。

『そういうのじゃなくて、どんな見た目かはわかんないんだけど、幽靈だつてことはわかる感じ。背筋がぞつとした』

これは八代友人。

『女の靈とかじやなくて、もつとよくわかんないやつ』

ほとんど同時に、すぐに続いたのは津田真一だ。水無月景子は、いまのところ姿を現す様子がない。

「……要領を得ませんね」

万太はつぶやいた。どんなものかもよくわからないが、幽靈だということはわかるというの、いつたいどういうことなのだろう。

「まあ、無関係じゃないよなあ。城と同じ田に悪將軍、操られた教師と男子生徒。それから、幽靈かあ。やべえ楽しい」

ヒロシは興奮を押さえきれないらしく、浮わついた声でいう。全力でおもしろがっているようだ。

妹は妹でやつかいだと思ったものだが、この兄もまったく違つべクトルでやつかいだつた。そういう意味では三ツ山小亞羅も扱いにくい。彼女の周辺には、ちょうど良い、適度な人種はいないのだろうか。

「お、新しい書き込み。タイトル『要チェック生徒手帳』……あ、ナベがやばい！ 万太くんバトンタッチ！」

ヒロシは慌ただしく立ち上がり、キッチンへと戻つていく。

ナノカと二人暮らしで、ナノカの担当は洗濯のみ、その他の家事はすべてヒロシが行つているのだという。ナノカが料理をするところというのはどうも想像ができるないが、兄ヒロシが主夫のように働く姿にはそれほど違和感がない。料理の腕もあるのだろう。あの兄ならば妹のために努力を惜しまなうだし、裏付けるかのように空腹を刺激する香りはどんどん強くなつていく。

万太は腹を押さえた。己の欲望を振り払うかのように首を振り、パソコンの前にすわり直すと、ヒロシのいった書き込みをチェックする。

「……え？」

そして、眉をひそめた。

一度、じっくりと読む。すぐに胸ポケットから、生徒手帳を取り出した。ぱらぱらと開いて、気づく。

挟み込まれた、小さな白い紙。自分で入れた覚えはない。紙には、印字された文字で、こう書かれていた。

『どんな敵にも打ち勝つと信じている　この合図で、クラスの女子に襲いかかること』

まるで、指示書のようだつた。

万太はパソコンを見る。そこにある文面とまったく同じだ。書き込んだのは吉本猛。生徒手帳から出てきた、とある。

すぐに何人かの男子生徒が、自分の生徒手帳にも同じものが、と書き込んでいった。万太も一応、右にならつておく。

まだ数人ではあったが、予感があった。おそらく、2 Aの男子生徒、全員だろ？

二人の女子が、自分の生徒手帳には何も挟まつていない、と書き込んでいる。女子はあのとき操られる様子はなかつたので、当然だ。つまり、この指示書によつて、操られた……

そう考えるのが自然だつた。

しかし、だとすると　いつたい誰が、いつの間に。

ほとんど、悩むことはなかつた。

すぐに、思いつく人物がいた。

掲示板にも次々と、その可能性を指摘する書き込みが続していく。

『生徒手帳、なんだつて？』

料理が落ち着いたのか、ヒロシが顔を出す。万太は白い紙を差し出した。

『これが、生徒手帳に挟まつていました。おそらく、2 Aの男子全員に。書き込みによると、今日欠席した男子生徒の生徒手帳にも、同じものがあつたようです』

『ほーう』

ヒロシはミトンをはずし、紙を受け取る。

「ということは、悪将軍は紙切れによつて人を操ることができるのか。やべえ強え」

敵が人を操ることができるとこのは、わかつていのこじだつた。事実万太は、操られたのだ。

「ですが、目に見えない不思議な力ではないといふこのがわかつたのは、大きいでしょ。少なくとも何者かに接触され、これを忍ばされなければ、操られることはないということです。たとえば同じ空間にいるだけでいつの間にか操られてしまつといふのであれば、お手上げですが」

「おお、そうだよな。賢いな万太くん。そして前向きだな万太くん。だが妹はやらん！」

「この兄は、二言田にはすぐこれだ。万太はすでに反応するのも億劫で、黙つてスルーする。

「それで、それを忍ばせた犯人に、心当たりは……」

ヒロシはディスプレイに目をやり、興味深そうに鼻を鳴らした。それから、万太を見る。彼がなにをいいたいのか、万太にはわかつた。

万太は、うなづく。

「先日……先週の木曜日、生徒手帳が集められたのはたしかです。生徒手帳の大幅な仕様変更を検討していて、現在どの程度活用されているか調べたいからと。プライベートなことが書かれている場合には応じなくて良いとのことでしたが、数名の女子生徒をのぞいて、ほとんど全員が提出していました。返却されたのは、その翌日です」

その時点では、美少女ヒーローも空に浮かぶ城も存在しなかつたので、まったく深く考えなかつた。たとえばそれが今日だつたのなら、不審に思つたかもしれないが。

「集めたのは、もちろん……」

「ええ、担任の竹ノ内先生です。生徒手帳改訂の担当になつてしまつたのだと、雑談混じりにいつていました」

「怪しいなあ。怪しそぎて逆に怪しい。オレも高校生だつたらなあ、ヒロシがうれしきとした様子でいつ。当事者として参加したくてたまらないらしい。

しかし万太にいわせれば、ヒロシは十分に当事者だつた。実際に城を目撃し、こゝしてHPを開設して積極的に事態を解決せんとしている。そして、おそらくは一連の出来事の中心に近いところにいるであろう、野中ナノカの兄なのだ。

「そしたらナノカちゃんのクラスメイトになれちゃつてこれはもうたまらんな！」

そつちか。万太は首を振つた。

「花高の寮ならパソコンもないだろ。もうちょっと残つて、ついでに夕飯も食べていけばいいや。ナノカもそろそろ帰つてくるしな」さらりとそういうて、ヒロシが食器棚から皿を出し始める。さすがに甘えるわけにはいかないと、万太は遠慮の言葉を口にしようとしたが、漂う香りが決意を鈍らせた。

「ええと、それでは……掲示板も、気になることですし」いやそうなんだけどそうではなくて、しかしどうも、素直に礼が出てこない。口の中でもによもによと理屈をこねる。

それでもここはしつかり礼を伝えなければ、そう思つた瞬間に、ドアが開いた。

「ただいま！ 帰つたよー！」

明るい声の、ナノカだ。ヒロシが電話した際、もうだいじょうぶみたいだとはいつていたものの、やつと万太はほつとした。幼なじみであるという二人がケンカしていたのでは、あまり良い気分がない。

「お帰り、ナノカ！ 小亞羅ちゃんは、帰つたのか？ お、なんだそれ、『ゴーストやつつけチャーツ』DVDボックスじゃないか！ どうしたんだそれ！」

「別れ際にね、こあらちゃんが貸してくれたの。これ見て元気出してねつて。限定版なんだつてさ」

「すごいじゃないか！ お兄ちゃんも見たいぞ！ 今夜は徹夜だな、ナノカ！」

「ゴーストとは」

「拳で」

「語り合え！」

ナノカとヒロシが、拳をあわせて叫ぶ。

『ゴーストやつつけちゃーズ』とは、十年以上前にはやつた子ども向けアニメだ。DVDボックスは、期間限定通信販売のみの登場で、声優陣のコメントを収録したブックレットやヒロインのフィギュアまで同梱された豪華仕様、やたらめつたら高かつたのを覚えている。万太も欲しかつたが手が出るはずもない。

「ぼ、僕も……」

見たいですという雰囲気では、なんとなくなかった。万太は咳払いをする。

「あれ、万太くんだ。まだいたの？」

純粹に不思議そうに、ナノカが聞いてくる。そういうわれてしまえばかすかに傷ついた。というより直球で失礼だ。

「いてはいけませんか。調べていたんですよ、いろいろ。お兄さんにも協力してもらつてね。収穫もありましたよ」

「あ、こっちもすごいよ！ ナゾ仮面に会つちゃつたよ！ えつとね、悪将軍つていうのはあたしみたいに、だれかが願いを叶えてもらつてなつたみたいだよ」

まるで、帰りにお魚が安くなつてたから買つてきちゃつた、とでもいうかのようなテンションで、ナノカが重要な情報を口にした。

とつさには反応できず、万太は黙る。

いま、なんと、いったのだろう。

「ナゾ仮面……に、会つた？ どうやって、ですか？」

「呼んだんだよ、大声で」

「呼んだ？」

ますます混乱する。万太はメガネをはずした。深呼吸をして、か

け直す。

「……詳しく、教えていただけませんか？」

ナノカは腕を組んだ。顎を上げて、見下ろす。

「ふふん。知りたかつたら、そつちの情報も教えることね
「なんで悪役みたいなんですか。いいですよ、もちろん」

「じゃ、食べながらだな」

いつの間にか、食卓には三人分の料理が並んでいた。鶏肉のソテー、マスターードソースがけと、サラダにスープ。多めに用意していたのか、しつかり人数分の肉がある。

「いやあ、ナノカが友達連れてくるかもって思つたから、五人分ぐらいい食材買っちゃつてさ」

五人。万太は呆れつつも感心し、頭を下げる。

「では、お言葉に甘えます。すみません、ごちそうになつてしまつて」

「いいつてことよ。ヒーロー好きに悪いやつはいらないからな！妹はやらんけどな！」

悪い人間ではないのだろう。ただ変態なだけだ。

ナノカはとつぐに手を洗つてきたようだつた。イスにすわり、待ちきれないというように足をぶらぶらさせていひ。見事になにもする様子がない。対照的に、ヒロシはいそいそと麦茶をコップに注いだり、取り皿を出したりと、大忙しだ。

「では食事をいただきながら……話しましょ。お互に。あと、ナノカさん、心についても」

ちよつとかつこよくいつたが、二人はあまり聞いていないようだつた。マヨネーズ出して、あ万太くんはドレッシングかな、などとナノカは指示を出すのに忙しい。

「それでは、いただきます！」

「いっただきまーす！」

「……いただきます！」

この二人は、本当に事態をどうにかする気があるのであらうか

漠然とした不安を抱きながらも、万太もとりあえず、食事に専念することにした。

ナノ力の頭はパンクしそうだった。

昨夜は結局一時間しか寝ていなかった。一話だけといつて『ゴーストやつつけちゃーズ』を見始め、おもしろいからあと一話だけ、気になるからもう一話だけ……。明け方にナノ力は寝てしまつたが、ヒロシと、帰るタイミングを失つたらしい万太は、寝ずに見続けていたようだ。頭の中では懐かしのやつつけちゃーズのストーリーと、万太にいわれた今後の計画とがぐるぐるとまわっていた。要するに『ちやこちや』になっていた。

「あたしがやるべきことは……、ゴーストをやつつける、だよね」重たい臉をどうにか上げて、歩きながらナノ力がいつ。少し前までは寒い日が続き、昨日はちょうど良い暖かさだったが、今日はどういうわけか暑いほどだ。五月の気候は難しい。余計に頭がくらくらした。

その隣で、寝ていないはずなのに背筋を伸ばし、まるで不調を感じさせない万太が、きつぱりといつた。

「ちがいます。まずは竹ノ内先生の様子を探る……のは、あなたには無理そので僕がやりますが、あなたは悪将軍がだれであれ、敵を倒すことを第一としてください。昨日、向こうがわざわざいつたぐらいですから、相手側の狙いはそこなんでしょう。どう転ぶかは別にしてね」

「うーん」

敵、敵……ナノ力は昨日の話を必死で思い出した。

竹ノ内が黒幕である可能性があるのだというが、昨日の彼はどう見ても操られていたし、目を覚ましたときには記憶がないといつていた。それが演技だということもあるだらうが……。どうにも、釈然としない。

ヒーローなら悪将軍をやつつけてくれる

なぜ竹ノ内は、そん

なことをいつたのだろうか。竹ノ内が悪将軍本人ではなく、操られていたのだとしても、あの言葉が悪将軍のものであることはまちがいないだろ。挑発か、それともほかに、狙いがあるのか。

もしくは、「ヒーロー」「悪将軍」のほかになにかが……考え始めるときりがない。

「それと、心です。昨夜話したとおり、あなたがヒーローとしての力を手に入れた代わりになんらかの心を失っているのはまちがいないでしょ。ヒーローをやめたいのならばそれを見つけだすことが最優先事項でしたが、そうでなくとも逆の意味で、やはりわかつておいたほうがいい。これまでの十一年間を思い出して、考えておいてください」

万太は、メモ用紙を渡してくる。ものすごく受け取りたくなかつたが、仕方なくナノカは手を伸ばした。『キリリ天使ミラルンパ』とロゴの入ったピンク色のメモ用紙だ。ヒロシのものを使ったのだろう。

「えーと……良心、慢心、猜疑心、関心、感心、歓心、出来心、邪心、無心、無関心、苦心、細心、愉快、痛快、鬱々、迷い、後悔、悩み……」

「喜怒哀楽、といった大きなものではないでしょからね。細かいところで思いつくものを、いくつかピックアップしておきました。最初は『心』のつく言葉を考えていたのですが、そうとも限らないでしょから。まだまだ、あると思います」

「へえー」

ナノカは心から感心した。いつたいいつのまに。ずっといつしょにDVDを見ていたと思ったが、実際、ヒロシとともにやつつけちゃーズ談義に花を咲かせているようだつたが、彼はしっかりと働いていたようだ。

それに比べて、自分は。

食べてシャワーを浴びてアニメを見て、ただ寝て、そしてまだ眠い。

「万太くんは、偉いねえ」

「な、なんですか。当然でしょ」

万太がメガネを直す。ナノカは首を振った。

「偉いよ。なかなかできないよ。かつこいいと思つ」

「か……つ」

万太が立ち止まつた。

つらつらと、ナノカも止まる。時間が止まつたような、沈黙。腕時計に目をやつた。まだ余裕だが、止まるほどではない。

「どうしたの？」

顔を寄せると、磁石が反発するように、その分びつたり遠ざかる。「……あ、あなたにはいつておかなければならないことが、一つ、あります」

「うん、歩きながらでいいかな」「もちろんです」

万太は「ゴホン」と咳払いをする。しかし動く様子がないので、ナノカは歩き始めてみた。そうすると、一定の距離を保ち、隣に並ぶ。「まず、昨日の朝のことですが……転入生の話は聞いていたのですが、まだ制服が行き渡つていらないという話だったので、そつとは気づかず、対応が不親切なものになつてしましました。謝るタイミングを逃してしまつて、一口過ぎてしまつたが。もうしわけありませんでした」

淡々と、万太は謝罪を口にした。

ナノカはまばたきをする。

そういえば、門が閉められていた。そんなこともあつたなあと、まるで遠い昔のことのように思い出す。

「いいよ、もう。勘違いなんですよ。それにこの制服、お兄ちゃんが裏ルートで入手したらしいんだよね。初日から着たいだろつつて。だから、学校で注文したのはまだもらつてないんだよ」

「裏ルート……」

つぶやくが、深くは聞いてこない。その気持ちをナノカにもよく

わかった。

裏ルートといつ言葉を聞いたときには心からつらかったが、やめたのだ。だって聞くのなんか怖い。

「それで、もう一つは？」

万太は二つといつていた。軽い気持ちで尋ねると、もう一度立ち止まつてしまつ。

しかし今度はすぐに、歩き出した。斜め四十五度に顔を上げ、ナノ力のいらない方向に微妙に視線を避けている。

「その……昨日から、思つていましたが。あなたの言動は、あまりにも、誤解を招きます。それに昨夜、寝るときですが、ぼ、僕の膝に頭を……」「ホン、いやそれはまあ、意識がなかつたのだと思いますが……とにかく、もつと警戒心を持つて……」あ、警戒心？それが正解なんでしょうか。だとすると、警戒心を持つたらヒーローではなくつてしまつ……いや、待て、そういうことなら、足りない心はまだまだありますね……」

「なにぶつぶついつてゐる。ほとんど聞こえないんだけど。あたしだつて、警戒ぐらいするよ！ 警戒！」

ほらね、とナノ力はファイティングポーズをとつてみせる。ナノ力の思う警戒心の表れだ。

しかし万太は、それをごく冷淡な目で見た。

「そうですか」

まるで伝わつていない。

ナノ力はため息を吐きだした。自分には足りない心があるといわ
れても、まるでピンとこないのだ。

それに、どこか哀しい、寂しいような気持ちもある。

まるで、欠陥品だといわれているような……

とか考えるのは、実は一瞬だつた。なぜならナノ力は、この十二年間、とくに困つたこともなかつたし不満もなかつた。つまり欠けている心といつものにまったく心当たりがない。まあいかと樂観的に捉えている。

考へてもよくわからない」とは、考へない。

とりあえず、進む。

それがナノカの信条だ。

「ねえ、『変態』っていうのも、心の種類かなあ」
ちらりとしみのまゝに目をやつて、聞いてみる。万太は一瞬考えたようだつた。

「……どうでしょうね。まあ、そんなよつたな氣もしますが」「お兄ちゃん、ナゾ仮面に願い叶えてもらつて、変態の心なくしちやつたらいいのに」

「すぐに取り戻しそうですけどね」

たしかに、叶つた願いは一瞬でなかつたことになりそつた。ナノカはため息を吐き出す。

隠れているつもりなのかもしれないが、気づいていた。ビデオカメラを構えたヒロシが、しつかりとついてきつてゐるのだ。録画してどつするつもりなのだつた。

「まあ、さすがに仕事があるでしようから、ずっとではないでしょう。そういうえばお兄さんは、なんのお仕事を? いえ、ただの興味ですが」

「大学の研究員だよ。時間の融通が利くんだつてさ」

ヒロシが白衣を着てゐる姿はなかなかさまになつてゐると思うが、白衣を着てにやにや笑つてビデオカメラを構えている様子は怪しいことこのうえない。

だつてお兄ちゃんはナノカが大好きなんだ!
と熱く語られても引くだけだ。

ナノカももちろん兄が大好きだつたし、愛されてゐるのは嬉しくもあつたが、ときどき、ああ本当に変態なんだなあと思つことがある。その矛先が第三者に向いて迷惑をかけるよりは良いと思つことにする。

「振り切るというわけではありませんが、もつ少し急ぎましようか。まだだいじょうぶですが、二十分には校門を閉めなければなりません

んし

「閉めるんだ」

そこは譲れないようだ。ちゃんと氣をつけなきやと、ナノカは頭のなかの情報を改めて書き換える。学校は八時二十分までに行くこと。

不意に、カバンに引っかけたケースのなかで、携帯電話がぶるぶると震えた。歩きながら、ナノカはゆっくりケータイを引き出す。メールかと思ったのだが、そうではなかった。三ツ山小亞羅と名前が出ている。慌てて通話ボタンを押すと、小亞羅の声が飛び込んできた。

「ナノカちゃん！ 大変なことになつてるのー！」

ひどく取り乱した声だ。声のうしろから、叫び声まで聞こえてくる。窓の割れる音や、なにかがぶつかるような音。

ナノカはさつと血の気が引いた。昨日、女子生徒たちに襲いかかつた男子生徒たちの姿が、頭に浮かんだ。またあんなことがいや、おそらく、それ以上のことだ。

「学校ですね？」

万太の問いかに、はつとする。

「こあらちゃん、そー、学校だよね？ どうなつてるの？ あたし、いますぐ……」

「来るな」

応えたのは、小亞羅の声ではなかつた。低い男の声だ。

「……だれ？」

「来なくていい、野中さんは帰るんだ。今日は家から一歩も出るな。わかつたな」

その声には、覚えがあつた。

「竹ノ内先生？」

ブツリと、通話が切られてしまつ。無機質な音が続く。

ナノカは慌ててかけ直そうとして、思い直した。行つたほうが早い。来るなどいわれておとなしく帰るわけにはいかない。

「あたし、行くから！」

「ちょ……つ」

万太がなにかをいおうとしたが、悠長に聞いている場合ではなかった。ナノカは地面を蹴って、勢いよく走り出す。

学校でなにが起きているというのだろう。

気が気ではなかつた。

昨日、あんなことがあつたばかりなのに、家でもその対策を皆で考えていたのに……といつてもナノカはほとんど一方的に指示されただけだが……それでも、現実味が薄れていた。

家のなかは平和で安全で、危機感はどこか遠い出来事のことのように、消えそうになつてしまつていた。

現実なのだ。

悪将軍という敵がたしかにいて、ナノカはヒーローなのだ。

立ち向かつて行かなくては、ならないのに。

「許せない……！」

情けないという気持ちよりも、怒りが勝つた。風を切り、車をも追い抜いて、疾走していく。

花ノ宮高校は、すぐに見えてきた。門まで回り込むつもりもなく、走り込んでそのまま塀を飛び越える。学校にたどり着くまでは、制服姿の生徒たちを何人か見たのだが、敷地内ではどういうわけか誰にも会わなかつた。適当な昇降口でスニーカーを脱ぎ捨てて、校舎に入る。

いやに、しんとしていた。

全力で走ってきたナノカはすでに汗だくだが、校舎内はひやりとしていて、汗が一気に冷えていった。上靴を履いていない足の裏は冷たく、嫌な予感と共に冷気が身体を浸食していく。

電話で聞こえてきたような物音も、叫び声も、ない。

ナノカは、階段を駆け上がつた。とりあえずは2階に、小亞羅や竹ノ内に会わなければと思った。

途中とおりすぎる教室を覗くが、だれもいない。生徒は愚か、教

師も。カバンや教科書が散乱し、乱れた机やイス、割れた窓が、確実になにかがあったのだと伝えている。

「どういうこと……」

鼓動がどんどん早くなる。手遅れ、という言葉が脳裏に浮かんだ。

小亞羅やほかのみんなは、無事なのだろうか。

もしかしたらどこかへ、連れて行かれてしまったのだろうか。

「 つ！」

突然、背後から羽交い締めにされた。ナノカはとっさに腕を捻り上げて、身をよじって飛び退く。

お面をつけた男だつた。縁日で売つて居るような、アニメのお面だ。男は痛がるそぶりもなく、すぐに体勢を立て直してくる。着ているのは、背広だ。

「先生……？」

おそらく、そうなのだろう。転校したばかりのナノカには、だれなのかまではわからない。少なくとも、竹ノ内ではないことはたしかだ。

「操られてる……のかな。いまは、悪将軍の手下つてことだよね」両手を構える。やつつけてしまつていいものだろうか。ヒロシと万太が、悪将軍は指示書を持たせることによってひとを操るらしいといつて居た。ということは、どこかに紙が貼り付けられているか……内ポケットにでも入つて居た。

しかし、そんなことを考へて居る場合ではなさそうだった。

前方からも後方からも、ゆらゆらとひとが集まつてきていた。全員が背広かジャージか、女性の姿もある。制服のものはひとりもおらず、例外なくお面を身に付けて居る。

ぞつとした。

なんというセンス。

「悪いけどあたし……手加減しないからね」

しかし、人数が多い。しかも全員が大人だ。

大勢対一人、すぐに飛びかかつていかないといけない。ナノカは

足に力を込める。

「野中！」

どなりつけるような声が、響いた。

お面の教師たちの間を縫つて、走り込んできたのは竹ノ内だつた。野中さんと昨日までは穏やかに名前を呼んでいた彼は、いまは鬼気迫る様子で、まったく余裕がない。ナノカの手をつかみ、そのまま走る。

「先生？」

「どうして來た、家にいろといつただろ？！」

力一杯怒鳴られて、ナノカは身を小さくする。どうしてそんなに怒られているのか、わからない。

「だつてあたし、どうしても氣になつて！ みんなはびひじひやつたの、こあらちゃんは？」

「風に攫われた。おそらく、あの城にいる。あのお面は全員教師だ。暴力を振るうんじゃないぞ」

ナノカはとつさに叫び返そつとするが、なにをいえばいいのかわからなくなる。小畠羅が城にいる。小畠羅だけではない、おそらくは、この時間までに登校してきていた全員がとつことなのだろう。竹ノ内に手を引かれるままに、階段を駆け下りる。お面の教師たちは追つてきていたが、走つてくる様子はない。

「ここから出る。逃げるんだ」

竹ノ内の言葉の意味が、ナノカにはわからなかつた。

「どうしてですか！ だつてあたしが、悪將軍を倒さないと……！」

「おまえは女の子だらう！」

泣きそうなほどに感情のこもつた、声だつた。

ナノカはますます混乱する。

女の子だ。そんなことはあたりまえだ。

それが、どうしたというのか。

「戦うとかそんな物騒なことは、先生に任せとけ。ただでさえ昨日は……悪いことしてしまつたみたいだしな。いいが、走つて帰つて、

家に閉じこもつていいるんだ」

「だつて先生は、ヒーローでもなんでもないのに……！」

「ヒーローつて、なんだ」

いつの間にか、外に出ていた。

靴はない。しかしそんなことを、気にしているときではない。正門の向こう側で、あとから来たであろう生徒たちがこちらをのぞき込んでいる。門は閉められていた。万太が立っている。なにかがあつたことを察知し、なかに入れないようにしているのだろう。さすがだなと頭の片隅で思う。

「野中。ヒーローつていうのは、なんだ。力のあるやつのことか。すごく強いやつのことか。変身したり必殺技が使えたり、そういうやつのことか」

「あ、あたしは……」

答えられなかつた。

竹ノ内のいおつとしていることが、わかつてしまつた。ナノカは首を振る。そんなことを気づかせないで欲しかつた。

「あたしは……」

「先生だつて、ヒーローだ。だから、任せとけ」

竹ノ内が、笑う。

その背後で、風が舞つた。

「先生！」

ナノカがとつさに飛び出そつとする。しかし風のほうが早かつた。まるで意志を持つてゐるかのよつに渦を巻き、飛びかかつてくる。竹ノ内が、ナノ力を突き飛ばした。

ナノカがよろめく。その瞬間に、風が竹ノ内を捉える。叫び声も、聞こえなかつた。

風があつといつまに竹ノ内を包み込み、上昇する。それは、空の城へ。まるでそういうことが決まつてゐたかのよつに、真つ直ぐ伸びて、消えていく。

静寂が、残つた。

ナノ力は膝をつき、拳を握りしめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9908x/>

花ノ宮町限定 美少女ヒーロー

2011年11月23日10時48分発行